三右衛門。　ごうしたのだ。まだ通知をして居らんのか。

喜四郎。　いえ、滅相な、この間から二百六十八人の小作を戸毎に廻つて、淳々と說きましたて御座います。

三右衛門。　それで小作人等は不承知なのか。（間）不承知といつても、二十人か三十人、水呑だけの事だらう。まさか十段からの者はそんな事はあるまい。

喜四郎。　それなら、私はまだ心配も致しませんが、そのごうも今度の議會の豫算のやうに通過致しませんので。はや——

三右衛門。　何に、全部不承知だといふのか。

喜四郎。　はい、二百六十八人殘らず聽容れませんので。

三右衛門。　（大聲に）馬鹿!!

喜四郎。　は、はい。

三右衛門。　お前も俺の處へ來る迄は、宇都宮の稅務署長までした事のある男ぢやないか。是位のことを小作に承知さす事が出來ぬやうな手腕でごうする。また小作も小作ぢや、怪しからん。些ッとは時勢を考えてみるがいゝ。大隈內閣の時には米が拾參四圓が頂上だつた。今ぢや五拾圓を

突破して六十圓近くになつてゐる。安い時も高い時も働きは同じ事ぢや。唯困るのは地主ばかりで、今年らの稅の上げ方はごうぢや。田一段に二十八圓といふ前代未聞の酷稅でその上戰時利得稅だのなんだのと、よく精算して見ると、こつちへ得る處は一段に一石が缺けるのぢやないか。其邊の事が小作共も解らぬ事はあるまい。年貢の三斗位增した處が、米の廉い時の事を思へば何んでもない。

喜四郎。　はい、その邊の事は私も口を酸ッぱくして申したのですが、小作の方ではまたそれ相應の理屈が御座いましてな。そりや稅金も一段二十八圓からに上つたてせうが、こッちは肥料がやつぱり一段三十圓近くも懸る。人を雇へば三圓ではい、顏をして來ない。迚もやつて行けたものではないと、かやうに申しますのでな。イヤハヤ私も殆んど手を燒いて居りますので。

三右衛門。　そりや理屈をつければ、幾らでもある、しかし他の上り物だつて、米相應に高く賣れるのぢや。麥にしろ、野菜物にしろ、何んでも今は三倍からの高値だ。何んだ川崎もう一度行つて强硬に談判をして來い。

喜四郎。　はい、參らぬ事も御座いませんが、日那樣こりや迚も小作が聽容れるこッちや御座いませんぜ。向うもなか〳〵腰が强う御座いますから。

三右衛門。　おい、お前は主人の命令を用ひないのか、骨惜しみをするのか。

喜四郎。　ひやあ、飛んでもない。

三右衛門。　それなら行つて來なさい。先方が幾ら腰が強くても、多寡が小作ぢや。泣く子と地頭に勝てぬといふ諺の通り、地主のいふ事を聽かぬ奴が何處の世界にある。

喜四郎。　（當惑の色を泛べて）行かぬでも御座いませんが、一寸他から耳に致した事ですが、日那樣、小作人の後ろには、何んでも東京から勞働組合とか申す者がこの土地にも入込んで參りまして。

三右衛門。　何に、勞働組合？　それがどうしたのぢや。

喜四郎。　何んでも其の組合に、小作人を入れて、年貢の增すどころか、是迄の段一石五斗の年貢すら、もつと輕くするのが本統だ、資本家と勞働者とは、利益を等分するのがあたりまへだ、今迄の資本家は横暴すぎる。勞働者は餘り盲目だつた。勞働は決して資本家の奴隷ぢやないと、かやうな事を小作人に言觸して歩く者が居りますさうで、田澤から牧野の方ぢや、毎晩寄合をして居りますさうで御座います。

三右衛門。　（やゝ色を失し）何んぢや、そんな事を宣傳して歩く奴が、もうこの町まで入込んだのか。

喜四郎。　はい、さうのやうで、そんな矢先年貢を增せなぞゝ云つて歩かうものなら、それこそ袋

叩きに遭ふかも知れませんで御座います。

三右衛門。　ふうむ。（煩悶の體）怪しからぬ奴だ。そんな危險な思想をこの町へ吹込れた日には、それこそ地主ばかりぢやない、機業だつて、製紙だつて、資本家は總倒れだ。町の盛衰にもかゝわる。

喜四郎。　はい、實に御尤もで。

三右衛門。　一刻も其儘にして置けぬ。町長に逢つて意見を訊いた上、都合に依つては、知事に談判をして、そんな奴は町から追出して了はにやならぬ。さうだ倅は何んでもそんな方面の研究をして居るやうだ。一つどういふ性質のものか、よく訊いて見やう。

三右衛門急しく手を鳴らす。女中奥にて「はい」と聲して、女中お咲出づ。

お　咲。　お呼びで御座いましたか。

三右衛門。　うむ、實哉に直ぐ來るやうに。

お　咲。　はい、若日那樣なら、あの多分お出懸けかも知れません。

三右衛門。　何に、留守か。何處へ行つたのだ。

お　咲。　さあ、何處へですが、あの川崎樣ご存じぢや御座いませんか。

喜四郎。いや、私はな今朝起ぬけから小作人廻りで、若日那樣のことは一向う。

お　咲。あ、左樣で御座いますか、ぢや一寸奥樣に伺つて見ませう。

ト起つ。

三右衛門。あ、お咲。

お　咲。はい。

三右衛門。あのう、奥樣にこちらに來て貰ふやうにな。

お　咲。はい、畏りました。

お咲縁側傳ひに上手奥へ去る。喜四郎疲勞を感じて欠伸を噛殺す。三右衛門焦々して、自暴に煙管を叩いて、

三右衛門。歐洲の戰爭で日本が儲かれば儲かるでまた碌な事は起つて來ない。あゝあ二つゝ事はないものだな。

喜四郎。うゝ、うゝ、（欠伸を噛殺しつゝ）左樣で御座いますな。

三右衛門妻おさだお咲と共に出づ。お咲はおさだに坐布團を宛がつて下手へ去る。

おさだ。何か御用で御座いますか。

三右衛門。あの實哉は何處へ行つた。

おさだ。實哉なら、何んで御座いませう。また魚釣に行つたのでせう。

三右衛門。何んぢや、今日も魚釣に行つたのか。

おさだ。朝早くから利根川の方へ出懸けたやうです。

三右衛門。ふん、彼奴にも呆れて物が言へんな。俺がこれ位忙しい思ひをして居るのが解らんのかな。

おさだ。解らない事もないでせう。

三右衛門。解つたら少しは家の手傳ひをするこか、それが厭なら先達て俺が言つたやうに、町の會社へ出るこか、中學校の先生でもするこか、何んこかすればいゝのぢや。第一ロシヤから歸つてからこいふものは、毎日魚釣に行くのが彼奴の仕事ぢや、三十一にもなつて、のそのそ遊んで居るなんて、妙子の手前にも耻しくは思はぬのかな。俺は悴の事を思ふこ、愧しくて町も歩けん。

おさだ。ですから妾も八釜しく申すのですけど、實哉は東京でなら勤めもするが、この町ではごうあつても厭だこ申しますもの。

三右衛門。それが一人子の我が儘だ。東京で勤めの出來るものが、田舍で出來ぬ道理がない。此

町に居れば何を云つても大地主の若日那で通つてゆける。ごちらを向いても頭を下げる必要はないのぢや、結構な身分を何んど思つて居るのだらう。

おさだ。　それが實哉には氣に入らぬのですよ。あの子は、お父樣は自分のこゝや、この町の事だけ考へて、子供の身軀が腐つても、自分の傍から離すまいこなさる。

三右衛門。　な、な、何をいふのぢや。お前も、、、、實哉には俺は不賛成だつたが、大學を出るこ洋行までさした。二年か三年こいふ約束でやつたのを、四年も五年も歸つて來ない。この上家を出す事は出來ぬ。第一俺ももう六十五ぢや。幾ら達者こいつても、萬一の事があつた場合に、一人の悴が死目にも逢へぬこいふやうな事だつたら、親戚や町の者にだつて、面目ない話ぢや。いやもう何處へも出す事はならぬ。第一お前が甘いから實哉はあの通り親を馬鹿にして尻に敷くのだ。つまりお前が俺を馬鹿にしてゐるからだ。

おさだ。　あなたは、實哉の事こなるこ妾を叱りつけてばかりゐらつしやるのね。もうあれだつて子供ぢやなし、女房持の悴にさう叱言が言えますか。

三右衛門。　女房があらうが、子があらうが、云ふべき事は云はにやならぬ。

おさだ。　あなたがしつかりしておつしやつたら可いでせう。實哉の前へ行くこぐうつこもよう云

はない癖に、本統にあなたは陰辨慶ね。

三右衛門。　何に、お前までが良人に向つて何をいふのぢや。

おさだ。　何んですね。その顏は、、、、。

三右衛門。　うゝむ。

双方氣色ばむ。喜四郎は周章して、

喜四郎。　まあ〳〵、お二人こも良うごわす。それこ申すのも、若日那がお可愛いからで御座いますよ。何ね奥樣、今日日那樣は小作の事で、少し御機嫌がお惡いので――收獲(こもい)は眼前に迫つて居りますし、矢張りいろ〳〵の御心配からお氣が短かくおなりなので、まあごうかさうお逆ひなさらずこ、、、はい、お願ひ申しますると、、、、

おさだ。　妾は何も逆らふわけぢやないけれど、わけも云はずに頭から叱言ばかりおつしやるから。（ト少し落付く）

喜四郎。　さ、、、、それこいふのが、つまり氣の凝りから來るので御座いますよ。

三右衛門。　怪しからん。

喜四郎。　日那樣ちまあごうか。

三右衞門。まあぇ、わ、俺が死んだ後は五十年間汗水たらして築上げた高山家も目茶々々ぢやらう。

三右衞門下手に行きかける。

おさだ。あなた、何處へゐらつしやるのです。また本覺寺へ碁を打ちにですか。

三右衞門。そんな呑氣な場合ぢやないわ。愚圖々々してゐた日にや、地主は口が干上つて了ふ。

三右衞門怫然し乍ら下手に去る。

おさだ。まあ、どうしたといふのだらう。

喜四郎。奥樣御心配にや及びません。日那樣は小作の事について、町長樣のお家へお出になつたに違ひ御座いません。ぢれ私や一寸其處までお供して參りませう。ご免下さい。

ト下手に去る。おさだ不安の思入れ、間もなく下手奥より實哉の妻妙子手に電報を持つて出づ。

妙子。お母樣〳〵、大へんよ。

おさだ。まあどうしたの、妙子。

妙子。これ御覽なさい。今日兄が參りますのよ。

おさだ。まあ兄さんが、（電文を見て）ゴヾ三ジハンユク——おやそれぢやもう直ぐぢやないか。

妙子。唯今幾時でせう。（一寸起ち奥の間の置時計を見て）おやもう五分しかありませんわ。

おさだ。さう誰か早く停車場へ迎ひにやらなくちや悪いわね。

妙子。ぇ、でも此處へは始めて來るんですから、誰も顔を知らないでせう。

おさだ。それもさうね。お前が行くといゝのだけれど、着換えたりして居つては間に合ふまいし、でも大抵見當はつくだらうから、誰か急いでやりませう。家の時計は大分に進んでゐますからら。

ト手を叩くお咲出づ。

お咲。お呼びで御座いますか。

おさだ。あ、急いであのう若い者を停車場までやつてお呉れ、妙子の兄さんが來られるのだから。

お咲。まあ、御新造樣のお兄樣が。

おさだ。藤吉がいゝだらう。停車場で家へ來る年頃三十ほどのお客樣があつたら、お供をして來るやうに、（妙子に）大抵洋服だらうね。

妙子。ぇ、永く外國にゐましたから、多分。

おさだ。大方洋服を召してゐらつしやるだらうから、そのつもりで、大急ぎだよ。

お咲。はい、畏りました。

お咲去る。

おさだ。ま折角來られるのに、實哉が家にゐなくつて困つた事だ。早く歸つて來ればいゝが。

妙子。え、でも高等學校時代にはお友達だつたのですから、そんな事關ひませんわ。それに兄は官吏ですけど、そりや極く開放主義ですから、（間）妾なんだか兄に會ふのがきまり悪いやうな氣がしますわ。

おさだ。久振りで逢ふのに、何がきまり悪い事があるものか。嬉しいんだらう。ほゝゝゝ、其處は兄妹の情だもの。

妙子。そりや嬉しいには違ひありませんけど、兄の留守の間にもうちやんと奥樣になつて了つて。

おさだ。まあ、何をお言ひだね。お嫁入をしてお目出度い事ぢやないか。尤も兄さんの方からは歸朝する迄、式は待つて呉れといふお手紙も、歐米から貰はぬでもなかつたが、何分お父樣が實哉を家へ落付かす算段で、無暗に焦られたものだから、まあその事は妾から兄さんに悠り話をしますよ。

妙子。え、そんな事は些しも關ひませんわ。唯妾が兄に誓ひを破つた事がありますから。

トうつかり口を滑らす。

おさだ。え、誓ひを破つた。まあどんな事。

妙子。（ハッとして）え、いえ、何んでもない事なんですけど。

おさだ。兄さんに會ふと、何か叱られるやうな事でもあるの。

妙子。いえ、そんな叱られるやうな事ぢやありませんわ。

おさだ。それなら構はないぢやないか。これが兄さんの氣に入らぬ先へ嫁入をしたといふのぢやなし、實哉とお前の兄さんは、よく氣心も知つてゐる仲なら、尚更良緣だつたのだから、きつと兄さんもお欣びになるに違ひない。唯實哉があの通り毎日遊んでゐるので、妾や何んだかお前の兄さんにも肩身狹いやうな氣もするけれど、これも實哉があの通りの拗ね者なのだから、お前にも氣の毒でならない。

妙子。いえ、お母樣、妾そんな事少しも氣に懸けて居りませんわ。妾こそ不束なものですから、お氣の毒に思つて居ります。

その時下手より下男藤吉（女中）旅行鞄（トランク）二箇、洋傘、毛布、土産物など持つて、楚間の

縁側に置く。藤吉が上つて座敷の隅に運ぶ。

おさだ。　おや、もうお着のやうだ。

妙　子。　まあ、早いこと。

二人は起つて迎える。「や御苦勞〳〵」と快活な聲して、瀟洒な背廣姿の遠山行雄出づ。

行　雄。　やあ。

妙　子。　まあ、兄さん。

行　雄。　暫らくだつたな。壯健で何より結構々々。

おさだ。　まあ〳〵遠方をようこそ。

ト一同坐に着く。

妙　子。　こちら、お母様よ。

行　雄。　やあ、始めまして、この度は何からお話していゝか、私が遠山行雄です。何分宜しく。

おさだ。　申し後れまして、妾は實哉の母で御座います。この度は不思議な御緣で――まあどうか宜しく。

ト叮嚀に挨拶をする。

行　雄。　いや私こそ、何分御存じの通り、私共は早く母に別れたものですから、さぞ妙子も我儘な事だらうと心配して居ります。どうか御家風に合ひますやう、どし〳〵躾けて戴きたう存じます。

おさだ。　どういたしまして、でも實哉ごはご懇意だつたさうで、何より結構ですわ。

行　雄。　え、學生時代には柔道部の仲間で、お互に黒帶を爭つたものでした。あはゝゝゝ、あの頃まさかかういふ御緣にならうとは思ひませんでした。

おさだ。　本統に、この御緣ばかりは全く不思議でございます。

この間に、お咲茱萸子を持つて來る。

妙　子。　兄さん、いつ東京へ着いたの。

行　雄。　うむ、一昨日横濱へ上つて、其晩東京へ來たが、役所の方の事で忙しかつたものだから、まだ麻布の伯父の家も訪ねず、第一番にこゝへ來たやうなわけだ。

妙　子。　まあ、さうなの。

おさだ。　本統によくお訪ねくださいました。もう少し早く電報を戴きますと、皆なで東京あたりまでお迎ひに參りましたのに。ねえ、妙子。

妙　子。本統ですわ。つい先刻電報が來てお迎ひに行く間も何もなかつたのよ。

行　雄。や、ごうしまして、上野を發つ時打つたから、着くのはそんなものだつたでせう。しかし近頃は外國へ行くなごは、もう隣り村へ行くやうなもので、少しも億劫ぢやありません。時に高山君は、お留守ですか。

おさだ。え、こんなこゝ、知つたら、行くのぢやなかつたでせうが、少しも存じなかつたものですから、あのう魚釣に參つて居りますの、しかしもう程のう歸るだらうこ存じます。

行　雄。え、高山君が魚釣に？

おさだ。え、相變らず氣樂人て困りますすて御座います。

行　雄。ふうむ、それは暢氣で結構。やつぱり田舍に限りますな。全く長命が出來ますよ。はゝゝゝゝ。

おさだ。ほゝゝゝ、本統に意久地がなくてお恥しう御座います。

行　雄。あ、妙子、あの鞄ごあれをこちらへ。

妙　子。はい。

（妙子起つて鞄と包物を行雄の傍へ持つて來る。）

行　雄。（包物を取つて）兄さんは相變らず豫算超過でな、お土產らしいものも買つて來れなかつた、これをお宅へ。

妙　子。あ、さう。大方兄さんのこゝなら歐米にゐらしても毎日酒場へ日參だつたのでせう。

行　雄。あはゝゝゝゝ、さうでもないさ。（鞄から指輪を出して）これは紐育を發つ時、何かお前のお祝ひにこ思つて買つて來たのだ。

妙　子。まあ有難う。（箱を開けて見て）まあ可いこゝ、お母樣、兄さんからお土產を頂戴してよ。

（トおさだの前に出す。）

おさだ。まあ、こんな結構なものを、各自に、こんな事をして戴いて本統にお氣の毒で御座います。

行　雄。や、お禮をおつしやるやうなものぢや御座いません。

おさだ。ごう致しまして、有難う御座います。妙子、これをあちらへ。

妙　子。はい。

（トまつしさうに土產物を膝の上にて弄る。）

おさだ。それから、お兄さんのお部屋を離れにしたらごうだらうね。彼處は靜かだから。

妙　子。え、さうですわね。

おさだ。あの何んて御座いませう。ご悠りなすつてもいゝのでせう。久々の御歸朝ですから。

行雄。え、一週間位はご厄介にならうこ思ひまして。

おさだ。ま、もつこ御悠りなさいまし。田舍もこれから暫らく收獲で賑やかで御座います。

行雄。は、有難う。

妙子。兄さん、和服に着換えちやごう。

行雄。何に、洋服は四年越脱いだ事がないから、この方がいゝ。

妙子。あら、さう。

おさだ。それもさうだが、兄さんに早くお風呂を。

妙子。あ、左樣でしたわね。沸かすやうに呑附けませう。

ト手を鳴らす。

行雄。いや、もうごうかお構ひなく。

お咲出づ。

妙子。あのお咲、お風呂の用意をして。

お咲。はい、只今藤吉ごんが焚付けて居りますから、もうすぐに。

妙子。あ、さう。ぢやこれはお母樣のお部屋へ持つて行つて、鞄は離れへ運んで下さい。

お咲。はい、畏りました。

お咲は小さい方の鞄と包物を持つて上手奥に行く。行雄は起つて額などを眺める。妙子とおさだは、行雄には聞えぬやうに、新客を歓待する晩餐の相談をする。

おさだ。それでは、まあ一度電話で聞いて見た上だけご、五品ほご見計はして。

妙子。はい。

おさだ。御酒はなか〳〵召上りさうだね。やはり洋酒がいゝのだらう。

妙子。えゝ、それや矢張り、、、、ねえ。

その時、行雄は上手奥の間の椅子に腰を卸し乍ら。

行雄。やあ、僕の事なら、ごうぞ御心配なく！

妙子。ま、兄さんは默つてるらつしやいよ。こちらの事ですよ。

おさだ。田舍ですから、迚もお口に合ふやうなものは御座いませんよ。

行雄。や、何も要りません、なんならそのう高山君が釣つて來る魚で御馳走になりや結構ですな。

おさだ。ほゝゝゝ、迎も〳〵、實哉は魚を釣りに行くのではなくて、魚に餌を奪られに行くのですよ。けふ日は魚もなか〳〵悧巧で御座いますからね。ほゝゝゝ。

行雄。ぢやまだ新米ですな。あはゝゝゝ。

おさだ。ほゝゝゝ。

妙子。ほゝゝゝ。

一同笑ふ、その間にお咲再び出で、大きな方の袍と、傘、毛布などを抱えて奥に行く。この運びは尤も自然にすべし。

妙子。兄さん、一寸失禮してよ。

行雄。ああ、

妙子奥へ去る。庭園下手より實哉釣竿、籠などを提げて縁側から這入る。

おさだ。あ、お歸り、今日は早くて大層よかつた。

實哉。一向う釣れんでしたから。

おさだ。あの、遠山さんが來てゐらつしやるんだよ。

實哉。へえい、それは珍しい。

行雄。おゝ、高山君。

實哉。おゝ遠山君。

二人は緊と握手して、暫し無言。

行雄。ごうだい、久しく逢はなかつたな。

實哉。本統に久濶だつた。まあ御壯健で結構。

行雄。有難う。君もお達者で何よりだ。僕はこう〳〵役人になつて了つたよ。

實哉。いや結構だ。僕なぞは慷呵不遇で、毎日爲す事もなく、この通り田舍にくすぼつて居るよ。

行雄。いや〳〵さうぢやない。君のやうな熱心な社會改造論者は、充分英氣を養つて今後大いに雄飛して貰はなくちやならん。全く現代の日本には政治ごいひ、社會の制度ごいひ、何もかも改造する必要があるからな、ごうだい一つ實社會へ乘出しては。

實哉。うむ、そりや僕も大いに考へて居るが、（ふと考へて）まあ〳〵そんな事は悠り話さう。お母さん紅茶でも呉れませんか。

おさだ。はい、あのうそれから色々とお土產物を頂戴しましたから、お前からもよくお禮を。

ト去る。

實　哉。　さうでしたか。何か知らんが有難う。

行　雄。　や、お禮なぞ言はれる品ぢやない。あッ、時にごうも今度は、妹が――まあ何分賴む。

實　哉。　やあ、これも何かの御緣だ。面倒臭い改つた挨拶はヌキにしやう。君の妹を僕の嬶にしたからこいつて、今更君に兄さんこも云へなからうし、矢張り何んだ。一高時代に、寄宿舍で賄ひにボイコットを起した時代のやうな我か俺かの仲で行く事にしやうぢやないか。

行　雄。　あはゝゝゝ、君は相變らず、昔しのまゝの生一本だ。濁世に染らん處が頼母しいよ。そして何かい君はモスクオから歸つて以來、ずつこちらに居るんだね。

實　哉。　うむ、田舍へ引退したまゝさ。達磨は面壁九年こいふが、まだ一年にもなるかならんだが、僕はもう社會の改造こか、人生の向上こか、そんな難事業に携るここは、到底僕の本賓にないやうな氣がするのだ。矢張り凡夫は凡夫、魚でも釣つて居るのが分相應だよ。はゝゝゝ。

行　雄。　冗談ぢやない。君ほごの教養の深い、また才能の豐富な人は、まつたくこの世の中を指導して行く大切な器で、謂はゞ、民衆の燈火、社會の柱ぢやないか。

實　哉。　いや、多寡が一農家の柱にさえなり兼て居る僕が、社會の柱になるなごは夢にも及ばぬ事だ。第一學問があらうが、何があらうが、ない者よりは幾らか難文字を解して居るこいふだけ

さ。乞食でも金を儲ければ翌日から富豪こ云はれる世の中ぢやないか。恐らくキリストや釋迦が再來したつて濟度する事が出來さうにも思はれない混沌こした時代に、ごう力んで見たつて、盜賊が這入つた後で急てゝ戸締りをするやうなものだ。

行　雄。　ごうも君は不思議だね、學生時代にはなか〳〵の氣慨家だつたがな。その後雜誌などでも時々君の熱烈な論說を見て、大に啓發される處があつたが、まるつきり引込んで了つたね、やつぱり何んだよ。單調な田舍へ引込んで、精神上の感激が乏しくなつたのだよ。早く都會へ出給へ、都會へ。僕は國家の爲に君が埋れる事を惜む。

實　哉。　あはゝゝゝ。君も官途に就いただけあつて、なか〳〵官僚的辭令が巧みだなあ。その分なら、今に勅任官は疑ひなしだ。

行　雄。　謂戯かふのは止し給へ、あはゝゝゝ。

實　哉。　あはゝゝゝ。

おさだ紅茶を持つて出づ。

おさだ。　なか〳〵お話が饒みますやうですね。

行　雄。　いや何に、今大いに高山君を賛嘆して居つた處なんですよ。

おさだ。は、さうですか。まあお一つ。

行雄。有難う。

紅茶を喫る。妙子出づ。

妙子。あ、お歸り遊ばせ。

實哉。うん、珍客のこつた、兄さんに何かうんと御馳走をしてくれ。

妙子。え、あのう兄はあなたのお釣りになつたお魚を戴きたいと申して居つたのですよ。

實哉。あはゝゝゝゝ、今日は不漁で皆目かゝらない。

行雄。さうか、それは殘念だな。

實哉。その内鱸の旨いのでも御馳走しやう、利根川下りの奴は、また味が格別だからな。

行雄。さうだらうね。是非御馳走にならう。

おさだ。漁師が上手ですから、いつの事だかアテにはなりませんよ、ほゝゝゝ。

行雄。あはゝゝゝゝ。

おさだ。しかし、遠山さんも早く奥樣をお娶ひにならなくては、いつ迄もお一人では御不自由ですから。

行雄。え、家内ですか。そりや考へて居ります。

おさだ。ごなたかお心當りでも。

妙子。あら、兄さん、もう極つたの。誰れ、八木さん。

行雄。あんなハイカラは大嫌ひだ。

妙子。ぢや誰れ、宛てゝ見ませうか。えゝときつと宇田さんだわ。あの方なら語學もよく出來るし、人物も温厚だわ。それに兄さんもラブしてるのでせう。

實哉。ふゝゝゝ。

行雄。馬鹿云ふな。

妙子。あら嘘言つても駄目よ。妾ちやんと知つてゝよ、兄さん。

行雄。何をいふんだ。皆さんの前で——。

妙子。あら、あんな體裁ばかり張つて、だから妾官吏になる人嫌ひだわ。人間味がないから、條文や布告ばかり讀んでるるから、形式ばかりに流れて、内容が充實しないのよ。

實哉。これ〳〵折角遠い外國から歸つて來た兄さんを苛める奴があるか。

妙子。はゝゝい。

行雄。ごうもお前の口にかゝツちや叶はないよ。高山君生意氣な事を言つた時にはウンと鄭り付けて呉れ給へ。

妙子。妾の良人はそんな野蠻ぢやないことよ。

行雄。はゝゝゝ、ごうも驚くね。

實哉。まあ可い〳〵。時に遠山君、本統に妻君の心當りがあるのかい。

行雄。ま、ないでもないのさ。

おさだ。それはお結構ですわ。矢張りあの東京のお方でゝも。

行雄。いえ、田舍者ですよ。

おさだ。それは、あなた御冗談でせう。

行雄。處が本統です。

實哉。ぢや何かね、巴里あたりの田舍でゝも發見したのかい。

行雄。いや違ふ。外國だが少し見當が違ふ。

妙子。ぢや兄さん、外國人を娶ふの。

おさだ。まさかね。

行雄。いや日本の女ですよ。日本も日本、この土地の者です。

三人。えつ、この土地？

妙子。まあ、この土地つて、誰でせうか。

おさだ。この町の女學校を出た人で、まだ洋行した方もないやうだが、全體何處の方です。

實哉。全く妙だな。

行雄。いや全く妙なのだ。その女といふのはそりや不幸な女でね。何んと言つて可いだらうか。さう難しく云へば受難者でもいふのだらう。若い時代に何んでも土地の青年の誘惑にかゝつて半生を誤つた。そして宣教師に救はれて、ロシアのオムスクへ流れて行つた。其處で僕はその宣教師の紹介でその女に始めて會つた。

實哉。何に、オムスクで——

行雄。えゝ？（疑と實哉の顏を見て）何んだい。君も知つて居るのかい。

實哉。（ハッとして）いや何に、そんなわけぢやない。

行雄。でも餘り昂奮するから。

實哉。いや、僕もオムスクなら通過した事があるから、（間）まあ〳〵その先きを聽かう。

行雄。　その女は自分の身を犠牲にして、相手の男の幸福ばかり考へて、結局自分が滅びて了つたのだ。馬鹿こ云へば云へよう。無智こいへば無智かも知れぬ。しかしその女の通つて來た路を、冷靜に考へるこ、こゝが肝腎な處ですよ。妙子お前なごはよく頭に止めて置くが可い。男に踏にじられ、散々世の中から虐げられても、その女は、自分は女である、弱いものだこいふ事を自覺してゐた。愛も怨みも、最期まで男の幸福の爲に、犠牲にして了つた。自分を葬つても男の生涯を救ふこいふ、その純眞なしかも神の愛にも等しい宏大な愛の信念は、迚も凡人の心に宿る信念ではないのだ。その尊い信念をその女は持つてゐた、その爲に彼女は過去の罪惡から救はれて、信仰の人こなつた。僕はオムスクの町には約三週間ほごしかゐなかつたが或る寒い晩だつた。オム河の氷が破れて、その流れの音を聞き乍ら、宣教師からその女の身の上話を聞いた時には、僕は何んこも名條する事の出來ない熱い涙がこぼれたよ。男が性慾の爲に女の生涯を誤らす罪惡の如何に大なるものであるか、、、、それや僕だつて今日までには、淫賣も買つた、女郎も買つた、藝妓も買つた、下宿屋の女中こも關係した。稀には他の夫人こも、、、、それ程の荒んだ僕が、その女の話を聞いたくらゐで、涙が出るほご感激したのは、自分でもごういふわけだか解らなかつた。しかし場所が場所だ。シベリアの中部、オム河の下流、宣教師の家、月の夜、僕

の頭はより多くセンチメンタルにもなつてゐたらう。また現代の結婚する女に處女(ザフシン)はないこさえいふ位頽廢した時に、多寡が田舍娘の身の上話くらゐに何んの刺戟があらう。だが其處だ、一方謂つて考へねばならぬ處は、い、かね。若しその女がだ、最初の男から又次の男へこ、誘惑されて行つたら、決してその信念は固らなかつたらう、より淫蕩な女になつたかも知れぬ。しかし第一歩に於て、その男に對する愛が白金(プラチナ)のやうに、淨い固さを持つてゐた、つまり眞實がその女の生活に勝つたのだ。僕がその話に感動し、その女を慕ふやうになつたのも、その眞實に觸れたからだ。僕の身體に缺けてゐる眞實をばその女に依つて値付られ、始めて心靈の燈火を得たのだ。眞實の力を得て働きたい、これからはもう胡魔化しや虚僞で通つて行ける時代ではなくなつた。お互は正しい道を正しく歩ねばならぬ、ほんこうの眞實が最期の勝利だらうこ僕は思ふ。

實　哉。（限りなく懊惱の狀）それは君のいふ通りだ。それで何かい、君はその女こ結婚しやうこいふのかい。

行　雄。　うむ、さうだ。勿論だ。親が生きて居れば親にも會ひ、また最初のその男にも會つて、懺悔を求め、改めて許可を得た上で直ぐ僕はオムスクへ行く。

實　哉。　ふうむ、若しオムスクにその女がゐなかつたら。

行雄。世界中何處までゝも探す。

妙子。まあ。隨分熱心なこと。

おさだ。（ポツとして）さうですか、さうしてその方は何ごおつしやるのです。

行雄。森川お柳こいふのです。

實哉。（益々煩悶）

おさだ。森川？

行雄。お心當がありますか。

おさだ。家の小作に確か森川萬兵衛さか申すのがありますが、あれにも娘があつたやうだけご、はてなその娘はお柳こいつたのぢやないか知らん。

行雄。さうですか。イヤ調べませう。高山君、こゝへ來たのも一つはその用件を兼ねてやつて來たのだ。君も大いに力を藉してくれ給へ。

實哉。うゝむ。

行雄。君はこの土地の勢力家だし、君の力を藉りたら、多分その男や女の親のことは分るだらうと思つてね、大いに期待してやつて來たのだ。

實哉。うゝむ、解らぬ事もあるまい。

おさだ。實哉、本統に阿父樣にも相談をして、早速調べてお上げなさい。一生の定めだから、大切な事ですよ。

實哉。はい、承知しました。

行雄。ごうか、何分頼む。

お咲出づ。

お咲。あの、お風呂が沸きまして御座います。

おさだ。さう、では兎に角一こ風呂さツこお召しなすつて。

行雄。は、恐縮ですな。（起つ）

おさだ。お加減はいゝだらうね。

お咲。はい。

ト去る。行雄上着を脱ぎかける。

妙子。あ、兄さん、離れにちやんこしてありますから、あちらで脱ぐこいゝわ。妾がご案内しませう。

行雄。　さう、ぢや一寸失敬。

おさだ。　さあごうぞ。妾はその間に御飯のお仕度を致しませう。

行雄。　高山君、お先き。

實哉。　やあ。

三人は上手奥に行く。庭園に夕日射す、實哉は無意識に一寸起ち、また坐る。心空虚、傾て顔は暈り、復の、どん底から吐息を洩して煩悶。虫の聲淋しく途切々々に聞ゆ。

下手より三右衛門昂奮して出づ。

三右衛門。　ごうも町長も町長だ。實に怪しからん、あれでは町長の威信も何もあつたものぢやない。今度の町會でウンと苛めてやる。全く不信任問題だ。（實哉を見て）おい、實哉何んだつてこんな處にぼんやり坐つてゐるのだ。俺はお前を探してゐたのだ。

實哉。　さうでしたか。

三右衛門。　（困つたといふ風に）ごうもお前がもつとしつかりして呉れなくては困るよ。迚も阿父さん一人ではやりきれなくなつて來た。大變な事が起つて來たんだよ。世界風といふ奴が這入つて來たよりも危險だ。

實哉。　どうしたのです。

三右衛門。　ごうのかうのつて、お前そら新聞で近頃八釜しい勞働組合とかいふ奴な、あいつがとう〳〵この町までお見舞に來た。俺は早速町長に逢つて、町から退治して呉れといつた處が、そんな事は町役場では何んとも出來ぬ、權限がないといふのだ。權限があらうがなからうが町の迷惑になる事なら町長として骨を折るのが當然だらう。俺は大いに談判したが更に取合つて呉れない。證方がないから警察へ行くと、警部はよく調べて置きますといふだけだ。

實哉。　それで可いぢやありませんか。

三右衛門。　おい〳〵、お前までがさう呑氣では困るぢやないか。今度は年貢に三斗づゝ增させやうとしてゐるのにそんな奴が、小作人を煽動して呉れちや、年貢を增す處か、年々極つてゐるものさへ納めなくなる。

實哉。　阿父さん、年貢を增すつて、そりや誰が極めたのです。

三右衛門。　俺が極めたのだ。今迄のやうに一石五斗位でやつて行けるものか。まあ三斗增せば今の處でざつと壹萬六七千圓は違つて來る。それだけのものをないものにして、郵船株でも買つて置いて見ろ。六割の配當にしても、もう直ぐ小壹萬の臨時收入がふえる。

實　哉。　阿父さん、あなたは何處まで金を儲けたら滿足なさるのです。

三右衛門。　何處までこいつて、最限があるものか。先づ來年の納稅では弄詰俺が多額納稅者になる地位だ。なあさうなつたら貴族院で一つ大いに腕を揮ふ。その貴族院へ乘出すか乘出さないかといふ大切な瀬戸際に、そんな勞働組合なんて奴が來て小作人にへんな事を敎へて呉れては大變ぢやないか。第一地主があつて小作だ。さうだらう。つまり資本家だ、その資本家に弓をひく奴があるものか。

實　哉。　阿父さんは地主々々と二言目にはおつしやるが、小作がなかつたらどうします。田地は荒れ、水は枯れて、忽ち仆れなければなりません。資本家だといつて資本の所有を誇る時代ではありませんよ。資本家と勞働者はその利益を公平に等分してこそ双方が立ち行くのです。今迄は資本家一人が儲け過ぎた。勞働者は朝から晩まで額に汗して何故かうも窘しまなければならんのか、其處に目が覺めて來たのです。さういふ矢先き年貢を增すなんて、飛んでもない事です。

三右衛門。　おい〳〵、お前までがそんな事を云ひ出してどうなるのだ。皆なが戰爭で大儲をして居るのに、俺一人が安閑として居られるかい。今度の戰爭で儲けなきや、俺の一代にまた儲ける時はないのぢや。俺は死ぬまでこの戰爭が續けばいゝと思ふ。

實　哉。　馬鹿な。

三右衛門。　貴樣こそ大馬鹿だ。時勢を知らんのぢや。高い金を使つて洋行なさして來て何の役に立つ。親不孝者!!

實　哉。　阿父さん、僕は今度あちらの樣子を見て、尙更あなたが金儲に夢中になつてるらつしやるのを、情なく思ふのです。

三右衛門。　何に?

實　哉。　そりや金儲も必要でせう。だが金は儲つても世界的の大きな損失を考へて御覽なさい。多數の青年は殺れる、又は一生の不具となる、幸ひにして生殘つた者は永らくの戰場で荒んだ仕事に從事してゐた爲に、殘忍性を帶びて道德的に墮落をした結果はどうでせう。終ひには人間の大切な仁愛の本能は必ず滅亡するに違ひありません。さうなつたら世界は暗です。人生は金よりも戰爭よりも大切なのは、精神ぢやありませんか。それを思はれたら、あなたのやうに戰爭が一生續けばいゝなんて、夢にもおつしやつて下さるな、私は子として恥入ります。

三右衛門。　何を言つてゐるのだ。二言目には理屈ばかり毀やがつて、そんな理屈を習ひに、大學へやつたり、洋行さしたりしたのぢやないわい。青二才奴!!

實　哉。（無言）

喜四郎下手より出づ。

喜四郎。　若日那樣。また大日那樣ご御議論でございますかね。もうお止しなさいまし、議論に勝つても負けても親子の仲、ごちらがごうごいふのぢや御座いません。

三右衛門。　本統に大馬鹿な奴だ。

實　哉。　僕が馬鹿なら、あなたは人道の敵だ。

三右衛門。　う、、何に。

喜四郎。　（三右衛門を制して）さ、、、。それが不可ません。まア日那樣はお部屋へ、、、、御新造樣のお兄さんもございてらつしやるごいふ事ですから、今日はまあ、お靜かに、、、、ねえ、若日那樣もごうかもう。

喜四郎は三右衛門を無理に奥へ連れて行く。

實　哉。　（ぢつと考へて）うむ、年貢を增すなんて、そんな事をしたら大騒動が起る。そうだ。もう一度親父を靜かに說いて反省させなくちや不可ん。

ト急いで奥へ這入る。舞臺暫し空虛、庭園より和服姿の行雄四邊を眺め乍ら出づ。下手緣

側より妙子出づ。

妙　子。　あ、兄さん、もう上つたの。

行　雄。　すつかり可い氣持になつた。ごう考えても田舍は呑氣でい、な。高山君の思想が變るのも無理ぢやない。

妙　子。　え、まあ、お食事の出來るまで、兄さんこちらへるらつしやいな。

行　雄。　うん。

行雄家に上つて、上手奥の四疊半に入り椅子に腰を卸す。行雄が煙草を吸ふ。妙子が煙寸を擦つてやる。

行　雄。　しかし、何かい、高山君は始めからあんなに引込思案だつたかね。

妙　子。　え、さうよ。甚く沈鬱よ、碌に口も利かない方が多いわ。

行　雄。　ごうも妙だね。すつかり昔ごは變つて了つた。

妙　子。　え、大變快活な方だつたごいふ話でしたのに、見るご聞くごは大違ひよ。私ごはまるで性格（キャラクター）が合やしないわ。月ご大陽ほご感じが違ふんですものね。姿時々考えちやつてよ。本當に。

行　雄。　ふうむ。しかしそんな事は、決して人に話すのぢやないぞ。兄さんだから構はないが、

萬一こゝの家にでも聞えたら、お前が苦しまなければならん事になるからな。口を余程氣をつけなくちや不可ない。

妙子。　え、そりや解つてますわ。でもお父樣やお母樣には氣に入られてるのよ。大切にして下さるわ。

行雄。　はゝゝゝ、そりや結構だ。だがお前自身がお氣に召してるのでなくて、勅選貴族院議員の娘こいふことが、こゝの家の人の氣に入つてるのだよ。

妙子。　まあ、さうでせうか。まさか。

行雄。　いや、さうなのだ。年中其點に心を留めて置かないと不可ない。それはさうと、妙子。

妙子。　はい。

行雄。　あの事は高山君は氣がついてるまいな。

妙子。　何に、近澤さんのこと。

行雄。　うん、俺はあのことを一番心配して居つた。尤も近澤には僕からよく前後の事情を手紙で述べて諒解は求めて置いたけど、昨日も東京で逢つたが、可成り失戀の樣子だつた。

妙子。　そりや大丈夫よ。少しそんな事にでも氣の廻る人ならまだ可いのだけど、妾の事なぞ殆

ご考えてもゐないやうな處があるわ。しかし妾本當に近澤さんにお氣の毒でならないわ。でもあの時兄さんでもゐらつしやれば、兄さんからお父樣に話をして戴いたのですけど、何にしろ、こちらの舅父樣こ、實家のお父樣こが逢つて、否應なしに決めて了つた話だから、妾どうする事も出來なかつたのですもの。ずる〳〵ここんな事になつて了つたのよ、妾も隨分辛かつたわ。

行雄。　そりや俺も辛かつた。近澤だつて、また高山だつて同じ赤門に學んだ友だ。どちらを捨てゝどちらを立てるこいふわけに行かない。しかしこうなるのもお前の運命だ。詮方がない。近澤にはキッパリ諦めて貰ふこして、お前は何處までも高山家の柱こなり、土こなる覺悟がなけりや不可ん。いゝか、兄さんは改めて賴んで置くぞ。どんな辛い事があつて死んでも、お前は高山家の過古帳に死籍を置く量見を忘れては不可んぞ。

妙子。　はい。

行雄。　いゝか、解つたらうな、解つたら今度は改めて相談がある。

妙子。　まあどんなこと。

行雄。　僕はお前の過古の罪惡を、一日も早く高山君の前に懺悔をして置く必要があらうこ思ふのだ。お前こ近澤の關係の程度を包まず隱さず打明けて了つて、諒解を求めるのだ。

妙子。でもわざ〳〵良人の氣を悪くさせる必要もないぢやありませんか。

行雄。それが不可ない。そりや一時は氣を悪くもしやうっ。しかし僕の見る高山なら、きつこそれを許して呉れるこ思ふ。後でその事が、萬一外の者の口から、高山君の耳にでも這入つて見ろ。吾々兄弟は高山君を共謀して欺いた事になる。何にかやましい事があつては眞實の生活は出來るものではない。況して夫婦仲は尙更のここだ。一點の曇りがあつてもよくない。いゝかお前の一生に取つて大切な事だよ、よく考へてお置き、そして兄さんがこゝに居る間に返事をして呉れ。お前から言難ければ兄さんから高山君に話してもいゝから。

妙子。え、考えて置きますわ。

行雄。あ、大切な事だよ。お前の良心に平和が宿るか宿らんかの分岐點だよ。

妙子。え、分りました。

その時下手に、「ご免下さい〳〵」と騷然こ大勢の聲がする。

妙子。あ、何んだらう、兄さん、一寸待つて下さい。誰もるないのか知らん。

こ呟きつゝ控間に來て一寸下手を見込んで驚き、

妙子。まあ、大變、あんなに大ぜいやつて來て。

行雄。ごうしたのだ。

妙子。え、兄さん早く奥へ行きませう。

ト二人は奥へ去る。下手座にて、

甲。誰も見えねえやうだ。

乙。ま、構ふここはアねえ。重立つた者だけ上らして貰ふだ。

丙。しつかりやるだぞ。

なゞゝ拾壹調あつて、小作人大ぜい出で下手の控室へギツシリ居並ぶ。その内に序幕のお柳の父親萬兵衛も混つてゐる。口々に騷がしく喋舌る。

甲。これ靜かにしねえか。

乙。話が經らねえだつたらはア、此處一寸も動くこツちやねえ。

甲。解つたつて事よ。

その時實哉奥より急いで來る。

實哉。うむ、お前達は大ぜいて何にしに來た。

小作人一同叩頭して、

甲。ひや、若日那様でごぜえますか、唐突にお伺ひして、何んごも濟まねえでございますが、小作人はァ一同のお願ひに上りましてございます。

實　哉。ふむ、頼みこいふのは何んだね。事ご品によつては、強ち聽かぬでもない。言つて見な。

甲。有難う御座います。おい、お前から若日那様に申すべえい。大日那様にいふも同じこつたぞ。

乙。俺から願ふべえかな。

甲。さうすべえい。

乙。若日那様、他の事でも御座いませんが、この間からはァ、こちら様から今年からの年貢一段にはァ三斗づゝ増すべえご、小作一同へお達しで御座いましたが、是迄一石五斗の年貢でせえ、迚もぢやねえ重荷の處へ、肥料は上る手間は高い、飼牛の餌だつて月に四拾兩で利くめえちゆう矢先、田一段に三斗から殖やされた分にや、小作一同飢え死だ、皆なおッ魂消げてるでがすよ。わし共はァ親の代々から、かうやつて此方様の永えい小作してるだ。幾ら米が上つたからちゆうて、藪から棒に年貢上げられた日にや、もう明日からごうする事も出來ねえだで、あんたのお力添でごうか大日那様に、勘辨して頂くこたァ出來ますめえかね。萬人助けだ。お頼み申しま

すだ。

甲。お頼みしますだ。

丙。お頼みでござりますだ。御門の外まで小作はァ一同お頼みに參つて居りますだ。

實　哉。ふむ、成程。

萬兵衛。若日那様。

實　哉。、、、、。

（兩人凝と顔を見合す。）

萬兵衛。今はァ、嘉七さんが云つた通りだ。まだ二十段、三十段作る大けえ小作達はまだ幾らか貯蓄もありますべえが、俺らのやうに、四段か五段の小ッせえ小作になるご、ホンの其日暮しの、そりや慘めなものでございます。それもまだ元氣のえゝ働き盛りなら、百姓やめて俥でも挽きますべえが、この老年になつて、もうごうすることもはァ出來ねえ。やつこ子供の時から覺えのある鋤鍬持つてるお蔭で命をつないで居りますだ。まだこれで娘ッ子でもせめてゐて呉れりや、手助けにもなりますべえが。俺こ婆さんの痩世帶で、この上年貢を上げられた日にや、明日から路頭に迷ひますだ。飢死だ。そりあ地主様は大切だ。大切にや違えねえが、けんごも、小作こ地主様

ァ親子だ。乳のねえ嬰兒が可哀相だこ思つて、ごうぞー助けて呉んさろ、よ若日那樣。お慈悲だ、人助けだ。首聽てくんさろ!!

一　同。　ごうぞ、頼みますだ。

この間に、おさだ、妙子、行雄は一人づゝ奥より來りて、四疊半に入り互に囁きつゝ樣子を見てゐる。

實　哉。　宜しい、話はよく解つた。

甲。　何に、解つてくだすつただか。

乙。　おい、皆な、解つて下すつただよ、喜べ。

丙。　有難い。流石は若日那だ。學問があるだからな。

一　同。　有難うございます。

實　哉。　年貢を増せこいつたこいふのは、何か親父の方の間違ひだつたのだ。宜しい、今迄通りの年貢を正直に納めてくれゝばそれでいゝ。

甲。　ひやァ、聽容れてさえ貰ひますれば、正直に納めます處ぢやごぜぇません。

萬兵衛。　あゝ、これで助かつた、有難う御座います。

一　同。　有難う御座います。

乙。　さァ、それぢや皆なに早く安心さしてやるべい。

丙。　皆も喜ぶこつたらう。

この時、三右衛門血相變えて走り出づ。

三右衛門。　おい、待て。

一　同。　ひや、大日那樣だ。

一同坐り直す。

三右衛門。　悴は承知をしても俺は不承知だぞ。

一　同。　ひぇつ。

三右衛門。　貴樣ら、何を言つてるのだ。年貢を増したのが不服なら今日限り田地を返せ!それば かりぢやない。肥料の立替も今こゝで耳を揃へて返すのだぞ。

實　哉。　阿父さん!

三右衛門。　うむ。

實　哉。　あなたは何んこいふことをおつしやるのです。

三右衛門。こら、實哉、お前は誰に許可を得て、小作人に許したのだ。

實　哉。僕の良心が許したのです。

三右衛門。何に、貴樣は何處までさう馬鹿なのだ。たつた一人の父親に背いてまでも小作の味方をするのか。いや親はごうなつてもいゝこいふのか、家を保護しなくつてもいゝのか。

實　哉。阿父さんあなたには僕の心がごうして解らんのです。僕はあなたのたつた一人の味方ですぞ。

三右衛門。うゝむ。

實　哉。僕はあなたが大切、阿父さんを本統に保護しなければならぬこ思へばこそ、多くの小作人を心から愛するのぢやありませんか。

三右衛門。うゝ、何に!?

おさだ。まあ、(三右衛門を遮りつゝ)あなたは奥にゐらつしやいこいふのに、大勢の前でみつこもないぢやありませんか。

行　雄。まゝ、今日の處は私達にお任せ下さい。

おさだ。さあ、妙子、阿父さんを奥へ連れてお行き。

妙　子。はい。

三右衛門。えッ、怪しからん世の中だ。吾が子でさえ油斷がならん。

三右衛門は甚く立腹し乍ら、三人に連れられて奥に行く。

甲。若日那樣、何んこもはァお氣の毒なここで。

乙。大日那樣、あんなに御立腹ではァ、迚も今の話は、、、、。

實　哉。いや、心配には及ばん。僕が責任を持つて引受けるから、安心して歸るがいゝ。

甲。いやッ、有難う御座いますだ。

乙。若日那樣のお蔭で、小作一同は大助りで御座いますだ。

一　同。有難う御座います。

その時、佐野十作庭園より走り出づ。

十　作。大變〳〵、た、た、大變だ。おい、萬爺はゐるかな。

萬兵衛。おゝ、十作か、慌て込んで、その態ァ何んだ。

萬兵衛緣側に行く。

十　作。萬爺や、お前まァ大變だぞ。

萬兵衛。何が大變だ。婆さま卒倒でもしただか。

十　作。うゝん、そんなこんでねえ。もつと大變だ。お前おッ魂消るでねえだぞ。

萬兵衛。何んのこんだ。は、は、早く言つてくんさろ！

十　作。ほうら、七年前にゐなくなつた、あの、、、、お柳坊が歸つて來たゞ。

實　哉。えッ!!

萬兵衛。ひえつ!? お柳坊が歸つたゞ。（ワナ〳〵と震へて）十作!!

十　作。うゝむ。

萬兵衛。（十作の手をとつて）そりあお前、、、、本統のことけえ。

十　作。誰が、お前そんな嘘吐くものか。俺ア先刻お前の家にゐると、駐在のお巡さん來たゞ。何んでもお柳坊が町の警察まで來てゐるだから、直ぐお前に迎ひに來いといふだ。婆さん野良へ出てゐねえだし、俺アこゝまで一生懸命に走つて來たゞ。

萬兵衛。お柳坊が町の警察にゐるだつて、家飛出した間、何か悪い事したゞかな。

十　作。そんな事ごうでもえゝだ。死んだこ諦めた娘が歸つて來たゞ。早く迎ひに行くべえ。

萬兵衛。ゆめ、ゆめぢやあんめえな。

十　作。早く來いといふのに。

萬兵衛はその儘縁側を飛下りて、十作と共に去る。小作人は互に囁き合ひつゝ、實哉に會釋して全部去る。夕闇のなかに、實哉ぽつねんと坐り思案に耽る。虫悲しげに鳴く。

て、行雄出で縁側まで來た時、

行　雄。高山君、阿父さんの方は漸くなだめたよ。だが今夜は逢はぬ方がいゝだらう。

ト行雄は言ひつゝ實哉のまへに坐る。實哉は心空虚の如くふらふらと起ち奥へ行きかけたが、また思ひついたように行雄のまへに坐る。

實　哉。、、、、（何か言はんとして言葉出でざる樣子）

行　雄。うゝむ？

ト一膝寄せる。二人淋しく顔を見合はす、實哉は吻つと溜息を吐いて何事も言はず。すつと起つて下手に去る。行雄ぢと實哉の後姿を視詰める。

行　雄。、、、、？

電燈パッと煌く、行雄ちよつと電燈に心を奪はれて、ハッと我に還り不思議さうに小首を傾げる。

—（靜かに幕）—

第三幕　森川萬兵衛の宅

時　前幕の夜

貧弱なる小作農家の内部。上手寄に並足二重の居間、正面奥に通ずる三尺の出入口、その上手に戸棚、下手の壁に汚ない衣類二三吊してある。下手寄に圍爐裡、自在鍵に大きな茶釜などあり。二重より下手はやゝ廣き土間、下手入口の壁へ斜に、三つ竈の土竈を設け、鍋釜がかけてある。その邊には手桶、バケツ、その他臺所道具等適宜に置く。入口の内外には藁束山をなし、鋤鍬の類五六點立かけて、野道、田畑の遠見。家の柱壁など眞黒に煤けてゐる。

開幕

遠くに牛の啼聲、碾の音、佐しく聞えて幕あくと、薄暗いランプの蔭に、萬兵衛は手拭を鷲掴みにして涙を拭ひ、女房のお種は疊に面伏せて泣く。その眞中に旅に汚れた洋裝のお柳は悄然と坐る。薄命の親子三人はいつ迄も默つて泣いてゐる。

――五月雨ほど戀慕はれて
今ぢや秋田の落し水――

と、藁を打つ音と、その音に縺れるやうに歌が聞える。
下手より十作が大きな旅行鞄を重さうに背負つて來る。

十　作。　あゝ重い、四斗俵より肩が利くだ。
ト居間にどしんと置く。

萬兵衛。　御苦勞樣だつた。

十　作。　そんな事はア構はねえだが、萬爺ィまだ泣いてるのけ、もう置かッせ〳〵、い、加減にして置くだ。なあこれ婆さんや、お前もさう泣くでねえだ。本統ならはア赤飯炊いて祝はなくちやなんねえだぞ。おい、お柳坊や、お前も足掛はア七年越て生れた村へ歸つて來たゞ、嬉しかんべえ、東京がえゝの、やれ何處がえゝのこ云ふた處が、人間は生れ故郷ほごえゝ處はねえだからな。それにはアこの通り父やお母アも達者で生きてるだ。こんな有難い事アなかんべえ。これも皆な如來樣のお高庇だぞ。不足に思つちやならねえ、お柳坊、、おやお前も泣いてるだな。これそう泣くなこいふにさ。なあ、しかし無理もねえだ。明けても暮れてもこの七年間こいふものは、暑いにつけ、寒

いにつけ、萬爺や婆さんはお前の噂ばつかりだ、大方何處そこに野垂死でもしたぢやねえか、それこも澁ッ皮むけた方だから誰かい、男こでも世帶持つて、もう今頃はア我鬼の一人位出來てゐるかも知れねえちゆうてな。幾ら心配してもお前から消息はねえし、ごれだけ怨んだゝか知れねえぞ。

お柳。本統に皆さんに心配をかけて濟みません。

十作。ひや、暫く逢ねえ間に、そつくりはアお邸の言葉になつたゞな。しかしお柳坊や、お前何んだつてぢやないか、先刻俺がお前の荷物取りにはア警察へ行つた時、警部樣の話によるこ、お前ロシアへ行つてたこおつしやつたゞが、そりや本統けえ。

お柳。えゝ、ずつこロシアに居りました。

十作。ふん、そいつあ又恐しい遠い處へ行つてたもんだな。ロシアこいや確か滿洲の奥だんべえ、さうだ大かい國だこいふこだ。俺の悴の五郎も、、、、

お柳。（ハッさする）

十作。お前が村はアを飛出すこ、俺のいふ事も聞かねえで、滿洲さアへ稼ぎに行つたゞよ。初めは消息もし、金も送つて寄越したゞがな、一年ほど前から、ぱつたり消息をしねえだが、もしかそのうロシアへても行つたぢやねえかな。彼奴は、博奕は打つ、喧嘩はする、本統に始末におえ

ねえ極道漢だつたが、俺だけにや滅法優しうして呉れたゞ。お柳坊や、お前なんだらうな。あちらにゐる時、もしかその五郎に出遭した事はあるめえな。

お柳。五郎さんに、、、、

十作。悴に逢つたゞかな。あの五郎に、、、、

お柳。はゝい。

十作。おゝ、悴に逢つたゞか。

お柳。いえ、、、、お目には懸りません。

十作。（がつかりして）何んだ逢はねえのか。さうだらうな。廣い國だらうから。例ひ悴がロシアへ渡つたにしてもはア、余程廻り合せでもよくなかつた分にや逢ふ理屈のものぢやねえだ。やこりや俺の獨り合點だ。やつぱり其處は親子でな、ごんなやくざな悴でも、お前がかうして歸つて來たのを見るこ、悴も歸つて來てくれたらなアこ思つて、（自分の氣持をごまかすやうに）あはゝゝゝ（淋しく笑つて）あゝ、やつぱり年は老りたくねえもんだ。つい愚痴になつて不可ねえ。俺ア若い時分に親父に別れた時涙はア出なかつだゞが、親になつてみるこ、子供の爲にや泣かされ通しだわい。（泣く）

萬兵衛。十作ごんや、笑つてくれるでねぇ。俺ァまだ夢のやうな氣がしてなんねぇ。町の警察から此處へ來るまで、ごうして歩いて來たゞか覺えがねぇだ。

十作。尤もだ〳〵、無理はねぇ、俺だつて今にも悴が歸つて來たら、お前ごころぢやねぇ、正體崩して泣かずにゐられめぇ。

お種。それにしてもお柳や。ごうしてお前警察樣の御厄介にはァなつて歸つて來たゞ。惡るい事しねぇで、警察樣の厄介になる筈のもんでねぇだ。歸るなら歸るで、何故はァ一人で立派になつて歸つて來て呉れねぇだ。警察樣はァ迎ひに行くなんて、博奕や泥棒の身貰ひに行くぢやあるめぇし、小耻しいことだ。おッ母あ、それがごんこ合點行かねぇだ。

お柳。え、そりやお母さんがさう思はれますのは無理もありませんが、妾だつて決してお上の御厄介なごになつて歸りたくはありません。しかし今度の騒ぎで迚も〳〵ロシァには居られなくなつて、女や老人は領事館の保護を受けて、夫々國へ送られたのです。決してそんな惡い事をしてお母さんやお父さんの處へ歸つたのではありません。

十作。さうだ警部樣もなァ言つてたゞ、何も惡い事したぢやねぇ。彼地が戰爭で危ねぇだから、國で保護をして親許へ歸すのだ。妾さん、警部樣も俺にさう言つてござらつしたゞ。

お種。さうだかね。だが警察樣へ身軀賣ひに行つたなんて、村の人に聞えて見んさろ。森川の娘ッ子は警察から歸つて來たゞ、きつこ牢からでも出て來たんべぇこ、惡口いふに違ぇねぇだ。そんな外聞の惡い話があらすかよ十作ごん。

十作。ふむ、それはこつちの僻みこいふものだ。村の奴、何云はうこ構ふもんか、歸つて來ただけ儲けもんだ。ものは諦めやうだ、もうそんな愚痴は云はねぇこつた。

牛啼く。

十作。（思ひ出したやうに）牛が啼くので思ひ出したゞが、俺まあ飛んでもねぇここして置いたゞぞ。

萬兵衛。ごうしたゞかな。

十作。お柳坊、歸つて來たので、それにはァ氣を奪られて、牛を野良へさ打放したまゝ、今まで忘れてゐたゞ。

萬兵衛。えつ、そりや大變だぞ。今時分はァ腹空らして何處へ行つてるだか分つたものぢやねえ。

十作。さうだんべぇな。ちよッくら見て來るだ。

萬兵衛。早く行くがえゝ。

十作急てゝ去る。

お種。十作ごんも、お柳のことで一生懸命になつてだ。本統に親切だ。

萬兵衛。やつぱり五郎がゐなくなつてから、人間が變つたやうに氣が弱くなつたゞ。俺もお柳が家出してから、急に頭が白くなつたゞからな、親の心はァ誰でも同じことだ。

お種。お柳や、父ァでもおつ母でも、お前が家出してからこいふものは、一晩でもはァ樂に眠つた事なかつたゞよ。貧乏はしてもお前だけには事缺さなかつた。お母は父ァに内證でゞも、お前には好きなもの買つてやるやうにして育てゝ來たゞに。何が不足で家飛出して、今日まで消息一つしなかつたゞ、親の心子知らずごは本統にお前のこつたぞ。

お柳。お母さん、濟みません。ごうぞ許してくださいまし。そりや妾だつて、國を出てから今日まで、お母さんやお父さんのことを、一日だつて忘れた日はありませんでした。

萬兵衛。それほど思ふなら何故家飛出したゞ。

お柳。え、さうおつしやるのは御尤もですけど。これには色々云ふに言へない辛いわけがあつたのです。

お種。辛い譯？お柳や、その辛いこいふ事情、、、二人の前で聞かして吳んさろ。おつ母でも父ァでも、唯の一度だつてお前にはァ辛い思ひなんごさせた事、金輪際ねえつもりだに、、、、

お柳。お母さんさういふ風に解れては困りますわ。そりや妾はこの村でも他所の娘さん達が羨しがるほどお母さんやお父さんには可愛がられました。それはよく知つてゐます。それ程可愛がつて下さる親に、妾や、妾や、、、、嘆きをかけるに忍びなかつたのです。

お種。それぢやお前ごんな事をしたゞ。

お柳。えゝ。

萬兵衛。これ、お柳、お前はごんな辛い心配の爲に家出をしたか知んねえが、お前らの辛い心配ごいや、大方解つてるだ。男慥えて拔差ならねえか何んかより、外に心配のある筈のもんでねえ。何んでそれを阿母や俺に打明けなかつたゞ。お前がごんな事したつて、まさか家を出て行けごは言やしねえ。俺はお前の爲ならごんなことでも我慢の出來ねえものぢやねえ、お前が家はァ飛出して一人で辛い思ひしたよりもなァ、俺ァ七年間お前の身の上案じてゐた方が、ごれだけ辛かつたこ思ふだっ俺の胸の裡も察して吳れるがえゝだ。

お種。さ、お柳や、その理由、阿母に聞して吳んさろ。ごんな事だつてはァ、親に言えねえこ

いふ事情あるのものでねえだ。

お柳。ごうぞ、それだけは聞かずに置いて下さいまし。今こゝで云へる位なら、決して妾は七年前に默つて家出を致しはしません。

お種。いんや。言はさねえで置かねえ。そんな强情はるものでねえ、さアお柳言つて了ふがえゝだ。

お柳。えゝ、ですけれど、、、、ごうぞそれだけは、、、、

お種。ごうして、お前さう强情を張るだかな。誰がはア聞いてゐるわけのものでもねえに、父あゞ阿母二人限りだ。よ、お柳や、、、、

お柳。（無言）

萬兵衛。婆さん、もうえゝだ。さ攻うめねえがえゝ、又明日でも悠りゞ話をするだ。お柳も遠い處はア汽車にゆられて疲かれてゐるべえ。さあ七年振りで歸つて來たゞ。佛樣にお燈明でも上げて御先祖樣のお位牌に御挨拶はアするだ。

お柳。はい。（起つて）お佛壇のある處は昔しの儘ですか。

萬兵衛。あ、さうだ、七年前ゞ少しも變らねえ。婆さん、、、、ちよつくら見てやるがえゝ。奥

は暗いだから。

お柳奥に這入る。お種も續いて這入る。萬兵衛は旅行鞄を片隅に寄せる。虫蒂りに啼く。奥の間にて靜かに鉦の音。

お種不審さうに小首をふりつゝ出でまた奥の間を見込む。

萬兵衛。婆さん、ごうかしたゞか。

お種。ごうも怪しい。

萬兵衛。何がな。

お種。父さま、（低言に）お前にやお柳の身軀の樣子が解らねえかな。

萬兵衛。身軀の樣子、それがごうかしたゞか。按梅でも惡いだか。

お種。さうでねえだよ。お柳坊、姙娠らしいだよ。

萬兵衛。えつ、まさか、そん事あるめえ。

お種。いや、赤ン坊に違えね、ごうも先刻から樣子が變んだゞ思つてゐたゞ。肩で呼吸する處から、あの眼が何よりの證據だ。身持になるゞ誰でもあアなるものだ。

萬兵衛。ふうむ、またごうしてそんな事になつたゞかな。

お種。ごうしてこいつて、父さま、何處かに碍ごんがあるに違ひねえだ。

萬兵衛。ふうむ、さうだ。今まで一人でゐられるわけのものでもねえ、だが若しや赤ン坊だこしたら、こいつはよく聞かねえこ、生れても始末に困るだぞ——

お種。そうだこも、それはア心配だから、先刻から八釜しく問ふてみたゞ。

お柳來る。萬兵衛はぢろりとお柳を見て考え、土間に下りて、入口外の農具を内へ仕舞ふ。お柳は鞄を開け何か取出さんとする。

お種。お柳や。

お柳。はい。

お種。阿母は、何もやつこ歸つて來て呉れたお前を苛めやうこ思つて先刻から八釜しう云ふたでねえだから、お前はア氣持を悪くするでねえぞ。

お柳。あら、飛んでもない、おつ母さん、妾ごうしてそんな事を思ひませう。

お種。そんならえゝだが、父さまでも阿母でもお前の事を本當に思ふから、色々心配して問ふだでな。

お柳。それはよく解つて居ります。

お種。えゝかな。（間）お前何んだらう。お腹大くなつてるぢやねえだか。

お柳。（ぎくりとして）えゝ。

お種。それに違ひあるめえがな、龜の甲より年の効だ。阿母はア一目見ればそんなこと位すぐ解るだ。

お柳。はゝゝゝはい。

お種。さうだらうがな。

お柳。濟みません。（ハラハラとなく）

お種。何も泣く事はアねえだ。

その時萬兵衛そこらを片附て手を拭き〳〵居間にあがる。お種と顔見合して矢張りさうだつたといふ思入れ。

萬兵衛。これお柳何も悪い事はねえ。腹大くなつた事が、何も悪い事でも何んでもねえ、お前に赤ン坊出來れば父アの初孫だ。こんなはア嬉しい事はねえだ、しかしよ、お柳や、お前が家へ歸つて來た以上、又何處かへ行く意りでもあるめえ。うんにやお前が行くこいつても、今度は父アが傍一寸も放すものぢやねえぞ。それだけしつかりこ量見極めて置いて貰ふだ。さうなるこ、腹

の子が飛出した時、私生兒ぢやちッと困りもんだ、子供がはァ可哀相だてな。いゝか、お前の聟ごんだけは阿母や俺にちやんと云ふて置かねえと萬一の事があつた時に、狼狽へるだ。

お　種。　それで何かな、お前の聟ごん今何處にゐるだかな。やつぱり一緒に警察樣に御厄介になつて今度歸つて來たゞか。

お　柳。　いえ。

萬兵衛。　それぢや何んだな。ロシアにゐた時出來た子だな。

お　種。　そりや父さまさうに違ひねえだ。ずッと日本にやゐなかつたといふぢやねえか。

萬兵衛。　成程な、それぢやお前兵隊さんと一緒になつたゞな、（間）ふうむ、きつとさうだんべ、兵隊さんならえゝだ。きつと豪氣な子が生れるべえ。するとまだ向うで働いてゐるだな。なに、普通の兵隊さんか、それとも士官樣か、、、、よ、お柳や、早く聞かして、老人を喜ばして呉れ。よう。

お　柳。（無言）

萬兵衛。　これ、しやうがねえな、又默り込んで了つたゞ。そんなに老人に氣を焦つかすものぢやねえだちゆうに、、、、

お　種。　本統にさ、早く話して安心さしてお呉れつちゆうに、父さまがこんなに言つてぢやねえか、どうしてお前はそんな物不言になつたゞかな。昔しはハキハキした氣さくな娘だつたに。

萬兵衛。　お柳や、お前何故默つてるだ。何も俺らお前を窘めてるぢやねえぞ、腹ン中の子のお父さまの事言えといふに、それがどうして言はれねえ。その男がはァごんな男だからつて、生れた赤ン坊は、矢張り俺の孫に違ひねえのだ。

お　種。　これ、父さまにさう氣を揉すてねえといふに、まだ解らねえかな。

萬兵衛。　親にこれだけ喋舌しても云はねえなら、イヤもう聞かなくてもえゝだ。その代り父アもお柳はやはり打明けかれて次第に泣き沈む。その時少し以前より入口の前に來て樣子を窺つてゐた實哉は耐え兼て這入る。

萬兵衛。　あッ、若旦那樣。

お　柳。　まあ、あなた!?

萬兵衛は驚く、急に周章して、

萬兵衛。　おい、婆さん、何にボンヤリしてゐるだ。御本家の若旦那樣ぢやねえか。

お　種。　あッ、こりやごうも、、、、

夫婦は大に狼狽して四邊を取片附け汚ない坐布團を出して、ずッと下手に平伏す。

萬兵衛。　これはごうも、こんな穢苦しい處へ、はやようこそ。

實　哉。　突然にお邪魔をします。

萬兵衛。　ひやあ、まあようこそ。おゝさうだ。今日はまた色々こはア御厄介樣になりまして、何んごもはア有難う御座います。おい婆さんや、まだお前にはア話もしねえでゐたが、今日若日那のお慈悲で年貢を增す事はお助け下すつたゞ。

お　種。　ひや、有難う御座います。助かりますで御座います。少し取込がございましたので、はアうつかり致しまして御禮申上げませんで、洵にはや、、、、

萬兵衛。　（怯々し乍ら氣遣ひつゝ）若日那樣、何か年貢の事でゞも、またお越下されましたので御座いますかな。

實　哉。　いや〳〵そんな事ぢやない、今度は僕の方から折入つてお願ひに來たのです。

萬兵衛。　ひえつ、ごういふ事で御座いますかア、俺共で叶ひますことなら。

萬兵衛夫婦は顏見合す。

實　哉。　兎に角、一寸お邪魔をします。

ト實哉居間に上る。

萬兵衛。　さあ、ごうぞ。ごうも洵に穢苦しい處で。

お種は土間に下り茶の用意をして出す。

實　哉。　お柳さん。

お　柳。　はゝゝゝい。

實　哉。　兎に角無事で歸つて呉れて、こんな欣しい事はない。僕は君が歸つて來たといふ事を聞いて直ぐ警察へ行つたが、恰度一足違ひて君達は歸つた後だつた、署長に會つて一切の樣子は聞いたが、僕は今夜のうちにごうしても逢はずにはゐられないので、取敢ずお伺ひをしたやうなわけだ。

お種は茶を注ぎつゝ萬兵衛と共に實哉の言葉を審かる。

お　柳。　はい、御親切に有難う御座います。妾はごうなつても歸らない決心で居りましたが、餘り彼地が危なくなつたものですから、領事さんの命令で否應なしに還されて參りました。

實　哉。　君の本意には背くか知らんが、僕は安心をした。明日から漸く精神の止觀を得られる。

僕は君に救はれて日本へ歸つてからこいふものは、一日として君の身の上を思はぬ時はなかつた

萬兵衛。若日那樣、粗茶で御座いますが、お一つ。

實　哉。は、有難う。

萬兵衛。お柳や、お前御本家の若日那樣こ、そんな、御懇意に願つてゐたのかえ。

お　柳。え、いえ、別に。

實　哉。いや僕がロシアにゐた頃、お柳さんには非常な御厄介になつたのです。

萬兵衛。ひや、まあ、さうだッぺえかな。そいつは少しもはァ知らなかつたゞ。おい婆さん、お柳坊あちらで若日那樣こ往來してござらッしたゞこよ。

お　種。そりやまあ、娘こそ御厄介樣になりました事で御座いませう。少しも知らなかつたゞ。

萬兵衛。お柳坊がはァ何も云はねえもんだで、今迄何をしてゐたゞが、薩張り分らねえので先刻から婆さんこ二人で攻めてゐた處で御座いますだ。

實　哉。いや、それに就て是非お願ひがあるので、お柳さんの身軀については今後一切僕に任して貰ひたいのだ。

萬兵衛。ひや、お柳のこゝを若日那樣に。

萬兵衛はお種と眼線を合し、やゝ愁眉を開く。

實　哉。藪から棒にこんなこゝを言つては、さぞかし不審に思はれるだらうが、委しい事情は追つてお話するこして。

お　柳。（泣るやうに）あなた、何をおつしやるのです。それやお志は有難う存じますが、いつぞやバイカルの湖畔で申上げた事はお忘れでは御座いますまい。あの時も今も妾の決心は變つて居りません。どうか妾の心の誓約を守して下さい。

實　哉。いや、僕のいふ事を誤解されては困る。僕は今更君をどうしやうのこ、そんな事を考へて居るのではない。唯過去の罪を贖ひたいのだ。さうしなければ僕の心はいつ迄も救はれない。

お　柳。妾に依つて救はれるなんて、餘り意氣地のない話ぢやありませんか。お身分にも關りますよ。若し妾が歸らずに一生西米利亞の土になつたら、あなたはどうなさるのです。

實　哉。、、、、

お　柳。ね、やはり還らぬ者こ思つて、どうか早くお邸へお歸りください。

萬兵衛。これこれ、お柳、折角ゐらした若日那樣に、何、、、御無禮な事を申上げるだ。

實哉とお柳と妙子、その時、妙子と行雄は路に迷つて偶然出づ。

妙　子。　こに角訊いて見ませう。

行　雄。　あ、さうしてお呉れ。

妙　子。　（入口から覗いて）一寸お尋ねしますが、あの町へ出ますのは、ごちらへ參つたらお宜しいのでせうか。

萬兵衛。　え、町ですかい、そりやこの家の横手の細い道をずツこお上りなせえましてな、、、、

妙　子。　は、さうですか。

萬兵衛。　それから、

この時、妙子は實哉に氣がつく。

妙　子。　まア、あなた。

實　哉。　お、、お前ごうして。

妙　子。　兄さんちよいこ、良夫がこんな處に、、、、

行　雄。　え、、高山君が、そりやよかつた。

ト行雄も這入る。萬兵衛は呆然とする。

行　雄。　ごうも君が食事もしないで何處かへ飛出したものだから、非常に心配をして妙子こ二人

で探しに來たのだ。

ト云ひつゝ居間の方に來て、お柳と顔見合して驚駭。

行　雄。　あッ、お柳さんぢやないか。

お　柳。　お、、遠山さん。

行　雄。　（ッカ〳〵こお柳の傍に行つて）君がこんなこころに居らうこは夢にも知らなかつた。いつ歸つて來ました。兎に角御無事で結構々々、あ、あこんな嬉しい事はない。さア握手してください。

トお柳の手を堅く握つて、狂喜する、妙子は呆ッ氣に取られて、上り框に腰を卸す。

萬兵衛。　（驚いて）何んだお前、こちらの日那樣もお馴染なのか、、、、俺アおッ魂げて、今日は天狗樣にでも撮まれてゐるやうな氣がする。

行　雄。　それぢや、お柳さん、あなたの家こいふのはこゝなんだね。兎に角僕は君に逢へてこんな欣しい事はない。オムスクでお別れしてから、僕はごれだけあなたの事を思つてゐたか知れやしない。お、妙子、高山君。

行　雄。　（兩人うなづく）今日そら、僕が話をしたろ、僕が心靈の輝きにふれて世界中探し求めて

でも、僕が結婚を申込む女こいふのは、こちらなのだ。

妙子。 まあそうですか、、、、

行雄。 お柳さん、これは僕の妹で妙子こ云ひましてな、こちらは僕の親友ではあつたが今ては妹の亭主で、高山實哉こいふのです。以後懇意にしてやつて下さい。

お柳。 (困り果てゝ)はゝゝい。

行雄。 (お柳と實哉の様子に氣づいて)高山君。

實哉。 うゝむ。

行雄。 君は今日ごういふ用件があつて、こゝへ來てるのだね。

實哉。 、、、、。

行雄。 ごうも不思議てならない。默つて飛出してからずツここゝに居つたのかね。

妙子。 まあ、あなた、幾ら何んでも餘り酷いぢやありませんか。兄が始めて參つたので、皆さんこ御一緒に晩餐をして戴かうこ思つて居りましたのに、あなたがお見えにならぬものですからお母さんだつて大變ご心配なすつてるらつしやいますわ。妾達には内證で何しにこちらへるらつしやいましたのです。何か兄さんや妾にでもお氣に入らぬ事でもあつたのぢやないかこ、兄も大

層心配してあなたを探しに參つたのです。

行雄。 ま、妙子、そんな事はごうでもいゝ。

實哉。 (決然として)遠山君。

行雄。 うゝむ、

實哉。 僕は改めて君に話かある。いや、君ばかりではない。妙子、お前も聞いてお呉れ、僕は皆さんの前で懺悔をしなければならない。

一同。 えつ。

お柳。 あなた、何をおつしやるのです、あなたが一圖に考へてるらつしやるほご、世間こいふ處は正直な處ではありません。

實哉。 いゝんや、僕はもうそんな事を考えてる場合ではないのだ。僕のこれ迄の生涯を洗禮する日が來たのだ。遠山君君が今日僕の宅でいつたね、女の半生を誤らしたその憎むべき男こいふのは僕ちぢつたのだ。

行雄。 えつ、君がゝ、、、むうむ。

妙子。 まあ。

實　哉。　僕は君の話を聞いてゐた時、僕はまるで針の蓆に坐つてゐるやうな苦痛だつた。それでも僕は裁を纏つて、平氣な顏をして胡麻化さうとした。君の熱烈な話を聞いてゐる裡にも、僕は自ら何處まで圖々しく虛僞の假面を被らうとするのだらう。唯自分の心のやましさを、君や妙子に悟られまいとばかり腐心した。今君達が此處へ來合さなかつたら、或は永遠に知らぬ顏をして、僕は一生虛僞の人で終つたかも知れない。

行　雄。　ふうむ、全く奇蹟だな。まさかその男が君であらうとは想像も及ばなかつた。僕は君とは知らずに、今日迄その男をどんなに憎んだらう。自分の不品行を回顧る遑もなく、お柳さんの半生を暗に踏入れた男が唯憎かつた。いやその男を赦したにしてもその經路を憎まずには居られなかつた。

實　哉。　いや面目ない次第だ。君が憎む通りに世間の人は皆僕を憎んでゐるだらう。許す事の出來ない僕は不德漢だ。僕は宗敎の力を藉りて現代の人心を救はうと企てたが、その志を捨てたのもそれが爲だ。

行　雄。　それぢや何んだね。君はその後お柳さんに會つた事があると見えるね。

實　哉。　無論ある。その日が僕に取つては、僕が犯した罪の足跡を眼前に見せつけられた日だつ

た。僕はモスクワからイルクツク州へ遁れた時、暫らくバイカルの湖畔に止つて其處でも非戰論者として、布敎に從事して居つた。或日の事だ。その部落は突然過激派の一隊に襲はれて、僕は彼等の手に捕縛されて了つた。その時、僕の一命を奪はうとした惡漢がある、しかもその惡漢は日本人だ。

行　雄。　うむ、日本人が君の一命を奪う。

實　哉。　大方誰かに瞞されて過激派の群に這入つたのだらう。しかも此奴はこの村の者で、、、、僕は捕縛された身でなかつたら、充分訓戒をしやうと思つて居つた。それが君反對にそいつに危く殺されやうとしたのだ。

萬兵衛。　若日那樣、その日本人といふのは、若しか、あのう、佐野五郎とふ男ぢやごぜえませんでしたべか。

實　哉。　うむ、さうです。佐野五郎です。故鄕にゐた時からしやうのない無賴漢だつた。

萬兵衛。　え、矢張り五郎でごぜえましたか、それがまアどうして若日那樣はア殺害やうなんて量見になつたべか。それからどうなさいましたべ。

實　哉。　え、すんでの事に其奴にやられやうとした時、爺さん、僕はお柳さんの爲に命が助つて

今日かうして居られるのです。

萬兵衛。　え、お柳が若日那様を助けたゞ。

實　哉。　お柳さんは女でも男子も及ばぬ勇士です。その五郎を打殺して僕を助けてくれました。

萬兵衛。　ひぇつ、お、お、お柳が五郎ごんを撃殺したゞ。婆さん、、、、大變な事になつて來たゞよ。

お　種。　、、、、ごえらい事をして來て呉れたゞな。

萬兵衛。　お、お、お柳、お前まアごうしてそんな事をしたゞい。五郎ごんなら知らね仲ぢやあるめえし、わけ言ふて頼むこか、何んこかしたらよかんべえに、人を殺すこは怖しい事をして來たゞな。

お　柳。　え、てすけれども、あの時、妻はこうするよりしやうがなかつたんですもの、、、、。

萬兵衛夫婦は涙に暮れる。

實　哉。　それも皆僕の爲だつたのだ。僕によつて窘しみを與えた女に僕が一命を救はれる。逆縁こいはうか因縁こいはうか、僕は强ち神の戯れこして見過すこは出來なかつた。人道を說き、愛の尊さを教えやうこした僕は、自分自ら怖しい罪惡の種を蒔き歩いてゐたのだ。唯知らなかつ

たこいふだけで許さるべきものではない。

行　雄。　高山君、よく僕達兄妹の前で懺悔をして呉れた。しかしその罪は君が充分償はなければならない責任があるよ。それは君も自覺して居るだらうね。

實　哉。　自覺して居ればこそ悶えて居るのだ。

行　雄。　さうか。よし。（ト青いてお柳に向ひ）お柳さん、僕はあなたこオムスクでお別れしてからこいふ者は、あなたに結婚を申込む決心をしてゐたのです。それほどあなたを愛してゐた。しかし今かうして高山君から話を聞いて見るこ、僕の好勝手にはならない。愼重に考へなければならぬ時です。お柳さん、あなたは高山君を許してやつてくれますか、どうです。

お　柳。　許すの許さないのこいふお話ぢや御座いません。そんな事は疾うに濟んで了つて居るここですわ。

行　雄。　それぢや高山君をあなたは今でも愛してゐますか、え、。

お　柳。　、、、、。

行　雄。　遠慮なく言つて下さい。いゝですか。あなたの意志も確めないでこんなここを言つては飛んだ自惚かも知れんが、しかし高山や僕にこつては非常に大切な場合です。何に妹の前だつて

決して構ひません。包み隠さず眞實のことを言つて下さい。ねえ、お柳さん。

お柳。そりや愛してゐます。

行雄。え、高山君を本當に愛してゐるんですね。

お柳。え、さうです。しかしそれをごうするこいふ事はもう妾には出來ないのです。

行雄。ごうしてゞすか。

お柳。妾はあなたなり高山さんなりの愛をお受けする資格はもうないのです。そりやあなたの御親切も妾はオムスクでペトロフ先生からよく承りました。ですけれど妾は決然お斷をしたのです。

行雄。えつ。

お柳。妾のやうなものが、あなた方の奥樣になつたら、お顏を潰すやうなものです。妾は頑固なやうですけれど、ごちらをごうこいはず、お二人共にお斷りするのが妾の義務ですわ。またそれがみんな妾の悟の道にもなつたのです。ですから妾は一生獨身で暮します。

行雄。（がつかりして）ふうむ。

萬兵衛。お柳や、何んだかよくは解らねえが、若旦那樣の御世話にもならねえ。ひやつ、御新造樣の前だけんど御免なせえ、話がこんぐらがつて來てはァ、何もかも正直に打まけねえこ、よく

ねえだ。なあお柳や、こちらの旦那樣の御親切もお斷りするこしたら、お前はまァごうするだ。お前はそれでいゝこしても、お前のその腹ン中の子供をごうするだよ。よく考えねえこ不可ねえ。

行雄。えつ、お柳さんが子供を。

實哉。なに、姙娠をしてゐるんですか。あのお柳さんが。

お柳。、、、、

實哉と行雄は互に意外の感に思はず視線を合して嘆息を吐く。

萬兵衛。え、立派な姙娠でこぜえますが、それぢや何んでこぜえますけえ。お柳のお腹の子供はお二人のうち、ごちら樣にもはァ覺えのねえ事でこぜえますかな。

お柳。（耐り兼れて）お父さん、あなたは何をおつしやるのです。妾のお腹の子に、このお二人が記憶のお在りなさらう筈がないぢやありませんか。

萬兵衛。それもさうだ。いや俺のこりや早合點だつたわい。御親切におつしやつて下さるものだからはァ、てつきりさうだこ思つたゞ、まァお二人こも御免なせえまし。

お種。それぢや、お柳。その子は全體誰の子だ、お前に記憶が無うて子の胎る試實はこの世にあるわけのものでねえだ。何故それが言えねえだかな。阿母はお前の量見が分ンねえだ。

高兵衛。　よ、お柳、若旦那様の前だつて、何も恥しい事はねえ、こちら様お出でなさる前から、父ツが八釜しく言つてる通り、なあそのお腹の子は例ひ誰の子にしろ、俺の大切な孫だ。どんな水呑百性の貧乏生活でも、貰ひ子にやれこは言はねえ。俺は襁褓洗ひしてでも立派に育てゝ行くだ。

お　種。　よ、お柳や何時迄皆なに心配させるでねえ。早う云つて了ふがえゝだ。

行　雄。　お柳さん、あなたが姙娠して居る事は今迄知らなかつた。

妙　子。　兄さん、あなたはお柳さんを本當に愛してるらつしやるのなら、姙娠ぐらゐでぐらつく愛なら駄目なことよ。何も彼も過去の事は許してあげなくちや。

行　雄。　う、む。

妙　子。　（實直に）ねえ、あなたさうでせう。相對的な愛なんか本當ぢやないわね。絶對でなくちや。

行　雄。　解つてゐる、まあ可い。お前は默つておるで、、、（お柳に）ねえ、お柳さん、高山にしろ、僕にしろ、あなたの生涯が安全に救はれる事だつたら、ごういふ犧牲も厭はぬ決心です。方式を是非してゐる場合ぢやない。幸にあなたの良夫として、又そのお腹の子の父として終生俱にする方があつたら、それほどあなたに取つて幸福な事はない。それだつたらそのやうにお力添を

しやうぢやありませんか。ねえ高山君さうだらう。

實　哉。　うむ、僕も今その事を考へて居る處なのだ。だがごう考へても不思議だ。僕の見るお柳さんはまさかそんな、、、、これが正しい結婚によつて設けた子ならば疑ふ處はないが、先刻の話では一生獨身で暮すこいつたし。ねえお柳さん、僕は何處までも君を信じてゐるよ。しかしその子供の事だけは、明らかにして置く方が眞實ぢやあるまいか、、、、

高兵衛。　さうでがすども。それを八釜しく言つてるでごぜえますよ。これお柳や旦那様までがこんなにおつしやつてぢやないか。

お　種。　さ、言つて了ふだ。本當にお前ごうしたこ云ふだな。

お　柳。　（激しく感情の後決然として）えつ、云ひます。何も彼も申します！

高兵衛。　（喇として）ああ、言ふて了ふだ〳〵。

お　柳。　このお腹の子のお父さんこいふのは、あの、、、、ロシア人です。

一　同。　えつ!!

高兵衛。　えつ、ロシア人だ。お前まア毛唐の子孕んだゞか。

一同驚嘆の聲。

お柳。　え、さうです。

お種。　お前、まアそりや本當か、、、、

お柳。　本當です。頭の赤い、眼の蒼い子供が生れるでせうよ。

實　哉。　ふうむ、ごうしてまたロシア人なご、そんな事になつたのかな——

行　雄。　實に意外だ、しかしそのロシア人ご今でも文通は出來るのですか。

お柳。　いえ、名前すら知りません。

一　同。　えッ、

萬兵衛。　何に、名前も知らねえだア。（呆れる）

お柳。　これも大方約束なのでせう。妾は諦めてゐます。妾はかうした運命に生れついて居るのでせう。バイカルであなたにお別れしてから私は段々チタの方へ追はれて參りました。其處にはカソリックの信者が澤山居りましたので、ごうにか安心して居る事が出來ましたが、それも暫らくの間でした。矢張り直ぐ逃ねばならなくなつて、恰度妾はオムスクで刷染になつた鍛冶屋の若いかみさんや、活動の女優ご一緒に、もう一層のこごハルビンまで遁れた方がいゝご思ひまして、オノンまで行きますご、オノンの停車場は燒拂はれて了つてゐますし、ごうする事も出來ないので、町端れの居酒屋へ頼んで泊めて貰ひました。その晩大方居酒屋の亭主がお金にしやうご思つて合圖でもしたのでせう。夜中に過激派の兵士が來て、妾たちは到遂手込にされて了ひました。

萬兵衛。　何に、手込にされただ。お柳そんな目に遭つたら何故相手の奴の咽喉笛喰ひついでゞもそんな穢しいこご遁れなかつただ。

萬兵衛は憤慨する、一同は言葉もなく悄ぼりさうなだれる。

お柳。　え、そりや反抗かうのは知つてゐました。また後で舌嚙切つてゞも、死んで了ふかごも思ひましたが、しかし妾は身を汚されても、生きる處までは生きなければならぬご思つたのですそれでわざご靡びたやうな風に見せて漸つご生命だけ助かつたのです。姙娠ご氣がついた時は、日本の守備兵に助けられた時でした。、、、、こんな汚れた軀で生れた村へ歸れない事もよく知つてゐます。ですけれご日本の國が妾のやうな身軀でも大切に保護して下さる國の有難さを思ひますご、素直に歸らなければならない。生れた土へ戻るのが本當だご思ひました。誤つて出た妾は、矢張り誤つた軀になつて歸るのも、みんな妾が世の中へ踏出し方が間違つてゐたからだご思つて、、、、妾自身を悔ひるより外に、、、、（泣く）

一同靜然、涙を吸る。

萬兵衛。（激しく泣いて）あゝ、何んてふこつた。六十五年のあいだ、俺ァ人樣に迷惑もかけず、お天道樣上る頃から西へお這入りなさるまで、まッ正直に働いて來て、、、、こんなはァ喫き見るこは、、、、俺はァ婆婆つて處はもう解らねえだ、、、。

實　哉。尤もです。お嘆きは無理もありません。お柳さんがかうなるのも、やつぱり僕の罪だ。何處までも僕は責任を負はなければならない。

行　雄。さうだ。結果の如何を問はず、責任は君にある、しかしこりや餘程慎重に考へなければならぬ。僕は君に相談したい事もある。兎に角今晩はこれで失禮をして明日また悠り來るこしやう。

實　哉。うむ。

行　雄。森川さん、お柳さんの事は高山君こもよく相談をして、決して悪いやうにはさせませんから、餘り御心配のないやうに、いゝですか。

萬兵衛。御親切樣に有難う御座います。何分宜敷くお頼み申しますだ。

實　哉。爺やさん、明日朝早く來るから、もう今夜は餘り言はぬやうにな。

萬兵衛。はい。畏りました。

妙　子。お邪魔をいたしました。

萬兵衛。皆さんにはや御心配をかけて、、、、。

實哉は土間に下り、お柳に何事か言殘さんとして振返る、お柳とお種は泣伏した姿に何事も云ひ得ず悄然と行く。萬兵衛は入口まで送る。

行　雄。高山君、今晩のうちに君こ二人限りて少し相談したい事もある。（時計を見て）まだ時間も大して遲くはない。さうだ妙子を町まで送つて、其邊を散歩し乍ら話さう。

實　哉。ああ。

外に月光輝く、虫啼く。

妙　子。（空を仰いで）いゝお月樣だこと。

萬兵衛。え、今夜は十三夜でごぜえます。

萬兵衛見送つて這入る。ランプの石油壺きんとする。

萬兵衛。あゝ、石油がきれて來たゞな。

ト土間の隅に行き罐を取つてふつてみる。石油がない。

萬兵衛。困つた事だ、婆さん石油買つて置くの忘れたゞな。仕方がねえ、佛樣の蝋燭でも燭すべ

えい。

お種奥に行き蠟燭を取つて來て、針差の上に燭す。ランプ消える。

お　種。　阿母(おっか)まァ胸が石のやうになつたゞ、ほんに穢はしい孕むにもはァ事缺いてロシア人の子を孕むこは何んの事だ。敵の子孕むこは、、諦めやうもねえ、(ふと偶發的に)お柳や、やうお柳。

お　柳。　(涙に濡れた顏をあげて)えゝ。

お　種。　もう詮方がねえ。そんな穢しい子なんゞ、いつそ墮して了ふだ。

お　柳。　えゝ。

お　種。　墮すがえゝだ。さうすりや後祟りもねえ、きれい薩張りするだ。

萬兵衛。　(急て、お種の傍に行き)婆さん！　お前何をいふだ！　滅多な事はァいふでねえぞ、例ひ誰の子にせよ、お柳坊に、、、、子を墮さすなんて、そんな惡しい事、俺ァ厭だ〳〵。そんな事したら、お前、、、、お柳は人殺しゝたも同じ事でねえか。そんな怖しい事、たつた一人の娘にさせられるかよ。

お　種。　だけんゞ、父さま。お柳は十作ごんの悴せえ打殺して來たゞよ。

萬兵衛。　(ぎくりとして)さうだつたな、、、、(甚く悶ゆ)あゝ助からねえ〳〵。ごつちにしても

助からねえ。(强迫觀念に襲はれし如く、ふらふらと入口まで來て、また居間の敷居に腰を卸す)人の足音がしても、何んだか胸がどきつくやうになつたゞ。十作ごんは何んにも知らねえで悴の歸るのを待つてるのだ。俺らがお柳を待つてるたやうに待つてるだらうな、、、、。

蠟燭の灯影悲しげに搖れる。道具靜かに廻る。(但し半廻しのこと)

(同家裏口)

農家らしく、藁束、はしご、落柴な入れし俵など積重れ、中央に三尺の入口、下手に高窓植込のあいだに見ゆ。

舞臺暫時空虛、やがて、お柳裏口の戸を靜かに明け、そッと拔出して、ふと氣附きし體にて下駄を脫ぎ、暫し躊躇の後、家に添ふて奥に去る。犬の遠吠聞ゆ。

下手より十作出づ。お柳の拔ぎ捨てし下駄に躓つく。下駄を手に取つて月明りに見る。不思議さうに暫時打眺めて、はてなといふ思入れありて入口に進入る。

十　作。　萬爺さん、もう寢んだゞかな、おや裏が閉つてるねえぢやねえか。

ト獨言して進入る。座の方にて、

萬兵衛。　十作ごんかな。

十作。おい、お柳坊はゐるかな。ごうも俺は心配でならねえ。

萬兵衛。えつ、お柳が、あツ、ゐねえやうだぞ。

十作。何に、ゐねえだ。

萬兵衛。何處へ行つたゞか、婆さん大變だぞ。お柳が見えねえ。

お種。ひえつ。

十作。さ、大變だ。おい萬爺や、かうしちやゐられねえだ。

ト十作萬兵衛お種狼狽して出で、暫時方向に迷ひて、お柳の去りし跡を捨鋏調に追ふ。

月光冴えわたる。碪の音。下手より實哉と行雄靜かに語り乍ら出づ。虫啼く。

行雄。この際君の執る道は、もうそれ一つよりないよ。

實哉。うむ、僕もさう思つてゐるのだ。唯氣に懸るのは親父の反抗だよ。

行雄。そりや詮方がない。何處までもそれに打克つ勇氣が肝要だ。體裁が悪いの、町や村の者に對してどうのこいふやうな、概念に囚はれて居つては、君はいつ迄も精神的に復活しないよ。いや死んでも救はれない。こりや一面からいふと君自身を救ふことでなくして、世の中を救ふことになるのだからね。お柳が正しく救はれ、君が正しい道に復活をすれば、それだけ人生は眞實が

充ちて來るのだ。いつ迄も迷はず決心をした方がいゝ。

實哉。うむ、夫ぢや萬事君に任さう。宜しく取計つてくれ給へ。

行雄。任して呉れるか。

實哉。今の場合に取つて、君は僕の救主だ。

行雄。いや、僕もこれで明日から明しい心持で働くことが出來る。僕も妹のことを、そつくり話して了つたので、胸の閊が卸りたやうな氣がする。ねえ、君の諒解を得て妙子は近澤の手に還すことが出來れば、それで友人は皆な圓滿に行く。偶然とは言へ今日僕が君の宅を訪問した事は、お互が新生涯に這入る神の導きだつた。

實哉。妙子の事は元の暮に還すことも、强ち困難でもあるまいが、どうだらう君、お柳は果して承諾をするだらうか。

行雄。さあ、それは何んとも解らないが、それもこちらの力一つだ。

實哉。彼女の頭は冷たく固つてゐるからな。

行雄。それも君の爲だ。溫くあるべき筈のものを、地の底に墜して了つたのだ。僕らでもこう少しこの事件が遲く持上つたならば、或は略外して居つたかも知れぬ。

實　哉。危ない處だつたなあ。

行　雄。本當に危ない處だつた。

實　哉。まだ寢んではるまい。

行　雄。例ひ寢んで居つても、叩き起して今晩の中に話を進めて置く必要がある。

兩人上手に行く、同時に道具元の場面に戻り、廻りつゝある裡に、兩人は入口に這入る。家の内、灯消え、唯正面奥の間の三尺の戸口のあいだの處より、月光物凄きまでに蒼白く射込む。

實　哉。爺やさん、もう寢みましたか。えゝ。

行　雄。何に、ゐないのか。

實　哉。眞暗だ、ても奥の間から月が射し込んでゐる、爺やさん、お柳さん！

行　雄。お柳さん!!

實　哉。誰もゐないのですか。僕ですが。

行　雄。ふうむ、妙だな、君マッチを早く擦り給へ。

實哉蠟燭寸を擦る。

實　哉。（四邊を見て）うむ、こんな處に蠟燭の燃え殘りがある。

ト實哉蠟燭に灯を點ず。

實　哉。誰もゐないやうだね。

行　雄。少し妙だな、そんな筈はないが、何處へ行つたのだらう。

實哉は蠟燭を持つて奥の間に行き直ぐ出て來る。

行　雄。誰もゐないか、、、、。

實　哉。うむ、ゐない、家中の者が寥から出て行つた形跡がある。

行　雄。えつ、（暫時考へてぎくりとして）君!!　ひよッとしたら。

實　哉。、、、、。

二人は疑と眸を合して、互に怖るべき豫覺に戰く。

下手より魂ぬけし如く萬兵衛とぼ〳〵と歸り來る。

實　哉。おゝ、爺やさん、お柳さんはどうした!!

萬兵衛。おゝ、若日那樣!!

實　哉。お、お、お柳さんは何處へ行きました。

萬兵衛。　お、お柳は、、、、。（云ひ淀む）

實　哉。　えゝ、お柳さんは。

萬兵衛。　お柳は、到遂畑の古井戸へ身を投げて死にましたゞ。

實哉は踉蹌めく。

實　哉。　ひえつ、お柳が身を投げた、、、、。

行　雄。　あゝあゝゝゝ。

萬兵衛。　、、、、!?

實　哉。　、、、、（涙に聲へつゝ）取返しのつかぬ事をして了つた。

裏口の方に人の迫りたる音騷然。實哉ハッとして奥の間を見込む。

萬兵衛。　十作ぢんが、お柳の屍骸を運んで來ましたゞ。

實　哉。　えつ、

萬兵衛。　若旦那樣!!（裏の方を指しつゝ）水を手向けてやつてお呉ンなせえ。お柳は誰よりも若日那樣に死水取つて貰ひますれば、欣んで成佛しますだ。

實　哉。　、、、、。

實哉は奥の間へ無意識に駈け込む。萬兵衛は踉蹌々々とよろめき、柱に身を支えて、次第に泣伏す。

行　雄。　あゝ、もう一足遲かつた!!

虫の音、鉦の音寂しげに。

—（靜かに幕）—

御用船

一幕

人物

一職人　亮三郎
一妹　お静
一亮三郎の妻　おさよ
一おさよの兄　十吉
一問屋の幹　藤田屋信七郎
一金貸　富五郎
一世話方　六兵衛
一小僧　良一
一役人　町田
一警官　固名
一近所の人々　大ぜい

第一場　亮三郎の家

時　ある年の初秋、但し享保以後のこと。

場所　京都高瀬川上流に近い處。

舞臺上手に常足二重の家體、家體正面に入り口際の玄關の間が見えて、その下手は臺所口、京都風の土間に、竈臺所用具、縁板に煤けた膳棚などある。家體と下手との區劃壁には、三尺の窓、窓の外は往來の心にて高瀬川を隔てゝ、町家の遠見、よき處に柳が二本ほど見える。居間の上手は中二階にて欄干附、一間半四枚の障子が建てゝある。中二階と居間のあいだには二三段ほどの梯子段、その下は袋戸棚、抽匣などがついてゐる。居間の下手の壁に寄せて處々禿げて木地の見えた塗算箱が置いてあつて、その上に粗末な佛檀に燈明線香、花が生々と新しい。誰かの祥月命日といふことが肯かれる。

（歌）と誌しのある、小さな漆塗のぼてが幾つもその居間に置いてある。いづれも絞りの生地がいつぱい詰つてある。

柱鴨居など、すべて塗りもので、一見して京の家といふ印象がそこはかとなく漂よつてゐる。

序幕

主人亮三郎と妹のおしずは熱心に生糸のやうなものに撚りを絞りの糸にかけてゐる。

夕方少し前のことである。

亮三郎。（仕事の手を休めて）なア、お靜、今日はこれ位にして置いたらどうだ。大分に仕事がはかどつたやうだ。

トぼてを引寄せて仕上つた分を手に取つて見る。

お　靜。たんと出來ましたこと。しかしもう少し稼ぎませう。（下手の窓から空を眺上げて）日が暮れるにはまだ大分に間があるやうです。勿體なうございます。

亮三郎。お前が毎日精出して呉れるので兄さんはほんまに欣んでゐるよ。阿母が歿くなつてからこいふものは、緑日一つ見に行くぢやなし、祇園樣だつて、北野樣だつてお祭りにても行きたい顏もせず、お前がせつせこ手助けをして呉れるのでな、兄さんは全く濟まんこと思つてゐる。（間）歿くなつた阿母に對しても申譯がない。

お　靜。あら、兄さんまたそんな事を云つて――妾働く事は何んこも思つてやしません。少しでも家の助けになれば、今の妾にはそれが一番い、ことだこ思つてゐますの。お母さんが、口癖のやうに云つてゐました。人間は働く爲に、この世に生れて來てゐるのだから、お前も一生懸命に働いて、少しでも兄さんの手助けをして呉れることが何によりも親孝行だこ云つてゐました。

亮三郎。（追想するやうに）さうだつたね。阿母はほんまにい、人だつた。しかも俺のこの馬鹿正直な、世間へ出したら皆目融通の利かない男こいふことをよく知りぬいてゐて、お前を俺の力になるやうに阿母さんは平素から躾けてくだすつたことが、今になつてようく解つて來た。亮三郎は正直すぎて、まつすぐな心は結構だけれど、もう少し融通が利かないこ、自分一人で苦しまなければならぬ事があるこ、おつしやつたが、俺も近頃自分の馬鹿正直こいふ事が判つて來た。

お　靜。でも、兄さん嘘を吐いて苦しんでゐるより、正直に暮らしてゐる方がどれだけ仕合せだか分りません。あの十吉さんのやうに年中嘘ばかり吐いて、人樣に迷惑をかけてゐるこ、段々それが當然のことのやうに思はれて來て、なかなか正直な道へ戻ることが出來ないものこ見えますね。あんな人は一生の不幸だこ思ひますわ。きつこ、あの人達には晴やかな明るみの日はないのですから――。

亮三郎。さうだこも。あの人もほんまに氣の毒なものだ。おこよのやうな優しい氣立の女に、こうして、あんな兄があつたものかな。同じ腹に生れた兄弟でありながら、まるで、鬼こ佛ほこ心

が違ふ。

お　靜。　ほんまに、姉さんも氣の毒ですわね。あんな兄さんがある爲に、姉さんは妾や兄さんになんぼ氣兼苦勞をして居られるか判りません。あの人の噂が出るたびに嫂さんは胸をひやつかせてゐなさるのがあり〳〵と見えます。

亮三郎。（溜息を吐いて）俺もそれは可哀そうだと思つてゐる。おとよにして見てもう親はなし、たつた一人の兄があの始末だ。兄さんもな、さうぞしてあの人の量見を直して、おとよに安心をさせたいと思つてな。これまでに隨分――（ト云ひかけてハツとし）いやしかしおとよの苦しみを救ふには、あの兄の心からして救つてかゝらねばならぬ。

お　靜。　ぞうぞして救へる工夫はないものでせうか。嫂さんも一生の苦勞ですわ。

亮三郎。　佛樣でも人間の曲つた根性を救はうとして色々な難行苦業をなすつてゐらつしやるのだ。俺のやうなやくざ者に、人の心なんぞ救へるものか。はゝゝゝさアさ、もうこれ位にして置かう。今日は、それに阿母の一周忌祥月命日だ。普通なら仕事を休んで、家内中で一日靜かに送る處だが、藤田屋の方で仕事を急ぐものだから、お前にも飛んだ骨を折らして。

お　靜。（仕上つた分を檢べて）兄さん二十四枚出來ました。

亮三郎。　さうか。そりや上出來だつたね。これだけ（ト自分の分も取上げて見て）出來て居れば信七さんがやつて來ても大丈夫だ。昨日の話にや今日夕方までに取りに來るこか言つて居つたな。

お　靜。　え、暮六つまでと云ふ約束でした。

亮三郎。　さうか、それならもう追つけ見えるだらう。

お　靜。　しかし、嫂さんが大層お歸りが遲いですこと。

亮三郎。（心配顏に）うむ、三條の清吉さんの店まで使ひにやつたから、女子の足だ。手間取つてゐるのだらう。（暗い不安に襲はる）

お　靜。　まあ、清吉さんの家まで？

ト亮三郎の顏を見る。亮三郎はその視線を避けて徐かに起ち、佛壇に燈明を上げて拜む。

その間にお靜は散かゝつてゐる仕事を取片附けて座敷を掃く。

金貸富五郎が下手の小橋を渡つて來る。

富五郎。（入り口の處にて）亮三郎さん、家かな。

お　靜。　はい。

富五郎。　俺だ。富五郎ですよ。

お　靜。　あゝ（ト駭然とした樣子で）あの兄さん――。

富五郎。　あゝ草臥れた。上らして貰ひませう。

ト座敷に通る。亮三郎は一寸周章の体、漸く氣を落ちつけて、

亮三郎。　これはようこそ。私の方から伺はうと思つて居りましたのに。これお靜お茶を上げなさい。

お　靜。　はい。

ト臺所に下りて茶の用意をする。

富五郎。　ごうぞ構はずにゐてください。ところで今日はあの方の期限だが、もう敲々に待つた揚句のことだ。約束通り今日こそ金を揃へてくだすつたらうね。

亮三郎。　はゝゝい。おつしやるまでもなく、今日は間違ひもなく調達をしますつもりで、この間から八方心配は致して居るのですが、何分にも手職の身で貳拾兩參拾兩ごいふ金は、、、、。

富五郎。　出來ないこいわれるのか。もし亮三郎さん、佛の顏も三度ごいふ事もあるぜ。

亮三郎。　へえ、それはよく解つて居ります。

富五郎。　解つてゐたら何故返しなさらぬ。半期ごいふ約束が延び〳〵になつて、恰度丸一年だ。

それもな、かうして、正直に家中で稼いでゐなさるお前さんのことだから俺も氣の毒に思つて半分元金に入れた限りで待つてゐたんだが、さう〳〵は待たれませんよ。

ト此間にお靜は茶を煎れて富五郎に出す。

亮三郎。　お靜、嫂さんはまだ歸らんな。

お　靜。　はい。

ト臺所を出て小橋の上に立つて、おさよの歸りを待つ。兄を氣遣ふ表情。

亮三郎。　富五郎さん、洵に濟まぬ、濟まぬがもう少しの間待つてください。もう〳〵この五拾兩ごいふ金も俺が貯つた金でなし、他人のために、、、、。

富五郎。　もうし、亮三郎さん。それは何んご云ひなさる。お前さんが使はうが使ふまいが俺の方ではそんな事を彼是いふのぢやない。立派に連帶の判がしてある以上お前さんにも知らないこは云はれまい。

亮三郎。　え、それなればこそ、貧しい暮しを切詰めてまで、例ひ半金でも入れて行きました。その間には三割五分の利息を月々拂つて行くのはなみ大ていの事ではござりませぬ。――夫婦妹ご三人がこの通り一生懸命に働きましても、あなたの利息を拂ふだけがやつごのことでございます。

富五郎。　これ（荒々しく）俺は金貸が商賣ですよ。いや高歩の金は承知の上で借りなすつたのだらう。それにお前さんの方の生活が立つの立たないのこ――今日はそんな事を聞きに來たのぢやない。さア貳拾兩の金をキツパリ返して貰ひませう。

亮三郎。　さう云はれましても今いふ通りの事情で――しかし私もこの間から色々こ心配を致しまして、今日もおこよを金の才覺にやりましたのですが、どうしたことか、まだ歸つて參りませぬ。

富五郎。　ふん！お前さんに工面のつかぬ金がおこよさんが出かけたこて才覺がつくちのか。今日はな、こゝの家體骨を叩き賣つてでも綺麗に片を附けて貰はう。

亮三郎。　そんな無理な事をいはれましても。

富五郎。　無理だ。何にが無理だ!!無理こは、ごちらが無理なんだ。半年餘りも待つだけ待たして、鐚一文も並べずに無理こは何事だ。平素から物の解つたお前さんには似合ない。餘り馬鹿になさるな。温しい人間だこ思つて優しく出てゐりや、何處まで附上つて來るのだ。（紙入れから證文を出して）この證文に書添えてあるここはお前さん忘れまいな。

亮三郎。　え、。

富五郎。　萬一返濟期限になつて、金を返せない時には、この家を明渡すこ立派に書いてあるぢやないか、金が出來なければ家を明渡して貰はう。

亮三郎。　そ、そんなここをしたら、家内中は路頭に迷はねばなりません。

ト嘆息を吐いて思案に耽る。この間、お靜心配になつて、おこよの歸りを氣遣ふ。

そこへ絞り問屋藤田屋信七が風呂敷包を背負つて來る。

信七。（小橋の上にて）お靜さん。

お靜。　まあ、信七さん。

信七。　兄さんは内かね。

お靜。　え、、またあの富五郎さんが來て、兄さんを攻めてゐます。

信七。　え、また來てゐるのか、執拗い奴だな。

ト窓から家の中を覗き、一寸思入れあつて家へ這入る。

お靜は臺所から顔を出して、

お靜。　兄さん、信七さんが。

亮三郎。　さうか、今日の分をお渡し申しておくれ。

お靜。　はい。

ト座敷に上つて、ぼてから絞りを出して揃える。

信　七。今日は。

亮三郎。毎度、御苦勞樣です。まア一服お上んなさい。

信　七。一寸お邪魔をします。御免――

ト宮五郎の隣りに座る。煙草盆を自分の前に引寄せて、貰の輪を吹く。兩人不愉快な思入れ。

お　靜。恰度、五十六枚出來て居ります。

信　七。それは有難う。大層精が出ましたな。

亮三郎。え、、妹やおこよが一生懸命にやつて呉れますのでな。お蔭で私も大助りでございます。

信　七。ほんまにな。おかみさんこいひ、またお靜さんこいひ二人揃つてよく働いてくださるので、家の親父もな、亮三郎さんは仕合せな人だ。又問屋こしてもい、職人を持つたのは何よりも店の信用をよくするこいつて、年中喜んでるますよ。

亮三郎。はい、皆樣が引立てゝくださるので、今年のやうな、不景氣な年でも、手をあけてるるこいふ日がなく、お蔭樣で忙しく暮らして居ります。

富五郎。もし／＼、俺の方の話は一體どうしてくださるのだ。

亮三郎。えつ、先刻からお話し申す通り、私の手許には、今が今貳拾兩は愚か、百の金も調ひませぬが、今にも、おこよが歸つて來ましたら、少し位はお顏の立つやうに、心配をして歸るかも解りませぬ。

富五郎。かも解らぬ。そんな手頼りない話をアテにして居られて堪るものか。詮方がない。金が出來なきや、これから人足を雇ふて來て、この家を開けて貰はう。

お　靜。えツ！

亮三郎。そゝそんな亂暴なことをおつしやつて――。

富五郎。亂暴でも約束なら詮方がない。

ト起ちかける。

亮三郎。まア富五郎さん、待つて下さい。

富五郎。待つたら金が出來るのか。

亮三郎。え、、それは、、、、。

富五郎。そんなら俺の思ふやうにする。えツ放せ！

ト兩人拾臺詞にて、二三度爭ふ。

信　七。　もし、よくお目にかゝるお方ですが出來ないこいふ金を無理に返せこいふのは幾ら高歩の金貸でも、お前さんの方がちつこ理不盡だ。

富五郎。　何に、理不盡だ？

信　七。　は、、、。お前さんも案外ものが解らんお方だ。家をあけさせるなら、この前々から亮三郎さんが貳拾兩に拾兩、都合參拾兩、元金に入れた、その金をば、この眼の前に並べて置いてからいふがい、。

富五郎。　え、。

信　七。　證文五拾兩のうち、參拾兩まで取上げて置いて、まだその上に家を明けさせる。ふん、これが理不盡でなうて、どうするのだ。

富五郎。　お前さん、人の話を横合から出て、、、、、餘計なお世話ぢやないか。

信　七。　餘計な世話かも知らぬが、店に取つては大切な職人の難渋を默つて見ては居られませぬ。

富五郎。　見てゐられない。それほど親切があるなら、お前さんがこの金を片附けるがい、や。

亮三郎。　ま富五郎さん、待つてください。この方の御存知のことでない。どうぞ、そんなに云はないで今暫くの處待つてください。決して、いつ〳〵までも御迷惑はかけませぬから。

おさよ怕然として臺所から來る。

お　靜。　あッ姉さん、兄さん――嫂さんが歸へられました。

おさよ。　遲くなりました。（力のない聲）

一同に會釋する。

亮三郎。　（ぽつとして）あ、、おさよ！どうだつた。うん、三條の方の都合はどうだつた。（せき込んで）え、先刻から、富五郎さんに八釜しく催促をされてゐる處だ。

おさよ。　（がつかりして嘆息を吐く）

亮三郎。　さあ、清吉さんの方はどうだつた。都合よく行つたのか。早く聞かしてお呉れ。これ、おさよ。

おさよ。　色々ごせつは詰つた事情を話して賴みましたが。

亮三郎。　え、、清吉さんはどう云つた。

おさよ。　貸さない事もないが、それでは亮三郎さんをだん〳〵ご苦しめて行くやうなものだ。け

ふ一日その苦しみを遁れても、また同じやうな苦しみを見なければならぬ。日頃親しくしてゐる間柄だけに俺はお斷りをするこおつしやいました。

亮三郎。（落膽して）えゝ！斷はられたか。

おさよ。はゝゝい。

亮三郎。さうか。

（永い間）

富五郎。はゝゝゝ。大方そんな事だこ思つてゐた。その方の口も駄目だこするこ、差當りごう云ふ事になるんだね。

おさよ。あなたにもお氣の毒ですが、所天もこの事は寢ても起きても心配をして居るのですから、ごうか姿共の手許もお察しくださいまして、（云ひにくそうに）月々崩づしにでもして、少し宛でも取つて戴きたうございます。

富五郎。何に崩し？はゝゝゝ馬鹿々々しい。半年も待つた揚句が月くづしなんておかみさんもそんな虫のいゝ話が出來たものだ。

おさよ。でもさうして、なるやうな話にして戴くより詮方がございませんもの。

富五郎。もし、おかみさん。お前さんもこの金に就いちや、餘り感張つたここ云えねえんだぜ。

おさよ。えゝ。

富五郎。もこ／＼この金を貸す時には、お前さんの兄さんの十吉がやつて來て、妹の亭主が商賣の資本にする。期日にはきつこ返すこいふ堅い話だつたから、俺も二つ返事で貸したのだ。

おさよ。えゝ十吉？（合點のゆかぬ科）

富五郎。さうだよ。何んでそんな不思議な顏をするんだ。商賣を始めるなぞは眞赤な嘘だ。人を瞞ましておいて、崩してお返しいたしますもないものだ。

おさよ。まア。（ト呆れて亮三郎をぢつと見る）

亮三郎。富五郎さん、お前さん一體何にを云つてるのです。そんな事はおさよの知つた事ではないぢやありませんか。もう何にもおつしやるこごはありません。私も決心いたしました。

おさよ。
お靜。（殆ど同時に）えゝ!!

亮三郎。家をあけるこも、ごうごもお前さんの勝手にして下さい。

おさよ。ひえつ、

お　靜。　兄さん、そんな事をしたら、嫂さんや姿たちは、、、、。

亮三郎。　何事も俺が悪かつたのだ。俺さえ覺悟をすればいゝのだ。

信　七。　亮三郎さん、失禮だが、その金は俺が立替ませう。

一　同。　え、。

亮三郎。　だつて貳拾兩の金を。

信　七。　何に、人の難儀は誰れでも同じことです。まして腕のいゝ職人を金の爲に苦しめて置くのは京で名高い絞り屋の暖簾にかゝはります。

亮三郎。　はい。

信　七。　心配なさるには及びません。又都合のよくなつた時、いつ返して貰つてもよろしい。

亮三郎。　はい、御親切に有難う御座います。

おさよ。　（ぽつさして）本統に助かります。皆が救はれます。この御恩は死んでも忘れません。

ト涙を曬る。

信　七。　何に、人は相身互ひです。（ト煙管を筒に入れて腰に差して起つ）では早速家へ歸つて親父に事情を話して直ぐに屆けてあげませう。富五郎さん、どうか、それまで、家へ歸つて待つて

上げて下さい。

富五郎。　大丈夫だらうね。

信　七。　痩せても枯れても藤田屋の信七です。一日引受けた上は間違ひはありません。さうだ七つ半までには、きつとこゝへ屆けて置きます。

富五郎。　さうか。さうきまれば文句はない。ぢやその頃出直して來やう。

ト去る。亮三郎おさよは拾圓詞にて信七に禮を云ふ。お靜は風呂敷に絞りを包んで渡す。

信　七。　（包を取つて）お世話樣でした。ぢや後できつと屆けて上げますから、安神してゐなさい。

三　人。　有難うございます。

ト一同信七を送り出す。

信　七。　どうもお邪魔しました。

ト去る。

亮三郎は淋しげに考込む。お靜は茶碗、坐布團など片附ける。おさよ、不審げに小首を傾けてぢつと亮三郎を視る。二人の視線が氣ぶすえな感觸にふれると共に行き合ふ。双方黙つて顔向く。

顔色すこし暗くなる。

お　靜。（ホッと安心して）信七さんが屆けてくださるつて、妾ほんまに安心しましたわ。先刻は全くどうしやうかと思つて、妾ハラ〳〵して——

おこよ。　えー

お　靜。　兄さんも嫂さんもどうしてさうぼんやりしてるらつしやるのです。永い間苦にしてるた借錢が助かつて、もうあんな怖しい富五郎さんに攻められることはなし、こんな欣れしい事はないぢやありませんか。

おこよ。　えゝ、それは嬉れしいことだけど、妾何んだか、もつと怖しいことがやつて來そうな氣がしてならない。

ト深い溜息を吐く。

お　靜。　嫂さん何をおつしやるの。

おこよ。（すつと亮三郎に寄つて）お前さん、水臭い。あんまり水臭うございます。

亮三郎。　えゝ、水臭い。水臭いとは何にが水臭い。

おこよ。　連添ふて丸三年——まだ何に一つ隱立した事のない妾が、隱されてるたかと思ふと、妾

や腹が立ちます。口惜しうございます。

お　靜。　まア嫂さん。（トなだめ顔）

亮三郎。（無言）

おこよ。　平素から嘘は大嫌いだ。どんな貧乏をしても嘘をついてまで世の中を渡りたくないと云つてるながら、その口の下で妾や靜さんを今日まで瞞してるらしたのだ。富五郎の借錢も先代の殘したのを切り替えたなど、云つてるらしたのは眞ッ赤な嘘だつたぢやありませんか。何んにも知らない佛樣はどんなにお前さんをお怨みでせう。どれほど苦しい事情があつたか知らぬが、佛をだしにしてまで、あの惡性な十吉兄と話し合ふとは何事です。あの毛虫のやうな兄とはどんな事があつても話相手になつてくださるなと、あれ程妾が堅く止めて置いたのに、あゝ、あなたの心には天魔が喰ひ入つたに違ひない。いゝえ、お前さんはきつと何にか惡い事をしてるられるに違ひありません。

亮三郎。　えゝ、惡い事。そんな事があるものか。

おこよ。　それでなければ、何故あんな鬼のやうな高歩貸の處へ五拾兩のお金を、妾たちには内證で借りにやりなすつた。（ト疊を叩く）

亮三郎。　え、。

おこよ。（涙を啜りつゝ）その利息に追仆されて、稼いでも〳〵、それやまアこの家へ死に來た妾故、ごんな苦勞をしやうこも露ほごも厭いは致しませんが――可哀そうにあの通り、娘盛りの靜さんは晴着一枚持たないで、日夜の手仕事、遊びに一つ行くてはなし、妾やいつても、すまん事だこ泣いてるます。

お　靜。（默つて泣く）

亮三郎。（堪まり兼ねて）おこよ！　これには色々こ深い事情のあるこだ。曲つた事こ嘘僞りの大嫌ひな俺が今日までお前達に隱してゐたのは、云ふに云はれぬ辛い譯があつたからだ。

おこよ。　それなら、何故一言その譯を妾に打明けて下さらない。お前さんの苦しみは妾の苦しみです。さア打明けて下さい。さア打明けて、、、、

亮三郎。　おこよ、何んにも云つて呉れるな。みんな俺が惡かつた。

（永い間）

亮三郎。（お靜には聞かすまいとして）これ、お靜、お前氣の毒だがな、これから直ぐに麩屋町の八五郎さんの宅まで行つて、兄さんは今晩六つ頃に顏を出すこ云ふ約束だつたが、攝處ない用事があつて、殊によつたら、伺へないかも知れませんこ、お前一こ走り行つて、斷りを云つて呉れないか。

お　靜。　はい畏りました。

ト起つ。

おこよ。　御苦勞樣ですわね。

お　靜。　ごうしまして。

ト提灯に灯をつけて、

お　靜。　行つて參ります。

亮三郎。　大分道が遠いから氣をつけて行けよ。

お　靜。　はい。

ト出て行く。亮三郎窓から外を覗く。

亮三郎。　もう日が暮れたね。おこよ灯をつけてお呉れ。

おこよ。　はい。

虫の音。

おさよは吊行燈に灯を入れる。火打石を打つ。一寸默かない。

亮三郎。　どうした。つかないのか。

おさよ。　えゝ、何んだか手許が震えてなりません。

亮三郎。　えゝ。

ぢつと顏を見合す。互に心の底を判む。

亮三郎。　おさよ。

おさよ。　お前さん、（矢庭に亮三郎の手をとり）妾はお前さんの女房ですよ。隱さずに打明けて下さい、後生です、お願ひです、どんな事でも驚きません。

亮三郎。　それ程までに俺のことを案じて呉れるのか。

おさよ。　三年も一緒にゐて、まだ妾の心が解りませんか。

亮三郎。　あゝあ、濟まなかつた。おさよ、實はな、富五郎から借りた五拾兩の金と云ふのはお前の兄の十吉に謀書謀判で騙られたのだ。

おさよ。　ひえつ!!（ト吃驚する）そゝそれやお前さんほんまですか。

亮三郎。　何んの俺がお前に嘘を云はふ。

おさよ。　えッ。それぢやあの十吉兄が、、、、あの謀判をして、、、、あゝあ。

ト泣き崩れる。

亮三郎。　譯を云へば長い事になるが、恰度歿くなつた阿母が死ぬ二タ月ほど以前のことだ。唐然にあの富五郎が證文を突つけて、もう後四ケ月で期限だから間違ひなく返濟をして呉れとの話に、俺は何にが何んだか譯が解らず、證文を見ると確かに十吉の手で俺の名を書いてある。俺は背へ熱湯を浴びせられたやうに、吃驚仰天したが、しかしそこで知らぬと云つて了へば、十吉は重い罪に問はれなければならぬ。現在女房の兄を何んぼ悪い人間だからと云つて、暗い所へ送れやうか。それでなくてさえ、阿母は十吉の悪い身持を厭ふて、お前まではき溜からでも拾つて來たやうに箸の上げ下げにまで辛く當つてゐた矢先に、そんな事を耳に入れたら、どんな事になるかも知れぬと思つたから、俺は默つて身に引受けてやつた。

おさよ。　えつ、そんなら、あれは十吉兄さんのために、、、、。

亮三郎。　うん、それから今日まで丸一年隨分辛い苦しい目をして、たゞひ三拾兩の金でも富五郎にかへして來た。阿母が死んでも妹がゐる。もしそれと知れたら、お前が妹にどんなに氣象ねをするだらうと、それがいとしさに、俺は今日まで何一つ打明けずにゐたのだ。俺の胸の裡を察し

て呉れ。

おさよ。　酒みません。酒みません。そうした事こは、妾や夢にも知らなんだ！（ト泣咽んで）そんな事こは知らずに、先刻から、水臭いの何んのこ、女子の淺墓な邪推から、出すぎた事を云ひました。――申譯が立ちません。舌嚙み切つて死んでも申譯が立ちません。

ト泣伏す。

亮三郎。　申譯がなんのこ、お前こそ水臭い。あんな人非人の兄を持つたのが、お前の不仕合せなのだ。

おさよ。　小さい時から、母や妾を散々苦しめて來た、あの兄、此頃は少し寄附かないで樂だこ思へば、かうした迷惑をかけてゐるこは、何處まで悪い人間なのか、、、、。一寸刻みに切り貫んでも飽足りないこはあの兄の事！いかに兄だこ云つても、今度ばかりは默つてゐられません。

亮三郎。　いや／＼、腹立は尤もだか、災難だこ諦めて、何んにも云はぬがい、。あんな男には對手にならないがい、。つまらぬ事を云ひ出して此上あたんでもせられてはならないから。

おさよ。　悪い人間が何處までも強かつたら、正直なものは一生苦しんで死なねばなりません。

亮三郎。　何に、神樣がちやんこ見てゐらつしやる。その裡に十吉さんも眼が覺めるだらう。

おさよ。　いえ、駄目です。今になつても、まだ直らぬ了見なら一生直りはしますまい。

その時、突然（奥所口）闇の中に十吉の聲がする。

十吉。　御免よ。

おさよ。
亮三郎。　ひえッ。（ト驚く）

亮三郎。　え、誰方ですか。

十吉。　馬鹿に暗いな。十吉だよ。おさよのお兄さまだよ。

ト縁板にどかりと仆れる。

兩人。　え、

ト周章する。

十吉。　おい、灯をつけたらどうだい。やぼこ晦日は暗がりがい、んだこか、よして呉れ。十吉樣のお入りだ。灯をつけろい。

亮三郎。　つけます。今つけます。（おさよに）今日は阿母の命日だ。大切な日だ。何にも云ふなよ。

おさよ。　は、、、い。

亮三郎急いで行燈に灯をつける。十吉は一升徳利を下げて縁板に醉倒れてゐる。兩人顔を見合して、嘆息を吐く。

亮三郎。兄さん、大そう御機嫌ですね。

十　吉。御機嫌？ふゝん、まづ御覽の通りゝ、、、、（ト寝込む）

おさよ。まあ、こんなに醉ふてから、兄さんそんな處へ寝ては困ります。

十　吉。むんや、寝ねえ、寝てたまるものけえ。俺ア今日亮三郎にちゝちつこばかし、文句があつて來たんだ。

亮三郎。えゝ文句、、、、。

十　吉。驚くねえ。俺ア管を巻くんぢやねえ。ほんの事だ。ちつこばかり手前に云ひ草があるんだが、、、、まアあわてるねえ、、、、

ト其の儘寝込んで了ふ。

亮三郎おさよは十吉の恋を見て、呆きれてゐる。やがて、おさよは亮三郎に座を外して外へ出よと云ふ科。亮三郎首肯いて、擊をひそめるやうにして。

亮三郎。そうだ。今の間に俺はお湯へ行つて來やう。

おさよ。さうなさいまし。

ト手拭をとつて渡す。

亮三郎。何んにも云ふなよ。

ト正面入口から出て行く。おさよは首肯いて亮三郎を見送る。壜敷に戻つて十吉の姿をぢつと見守り情なき思入れにて、次第〳〵に泣沈み、遂に擊をあげて泣き伏す。

十　吉。（ひよつと頭をあげて）おや、何にを泣いてやアがるんだ。おい、かう久し振りて俺が來てゐるのに、不景氣な眞似をすねえ、、、、（ト見まはして）おや亮三郎は何處へ行きやがつた、、、は、ア何んだな。手前亭主の野郎と摑み合ひでもやりやアがつたな。あんな煮久地のねえ野郎にひけを取る馬鹿があるけえ。おい、おさよ。十吉の妹ぢやねえか。しつかりしねえ。

トフラ〳〵とおさよの傍に寄る。

おさよ。兄さん！（きつとなる）

十　吉。えゝ。

おさよ。ごの顔下げてこの家へやつて來たのです。

十　吉。ごの顔下げてつて、この顔下げて來るより詮方がねえぢやないか。

おこよ。　此家の闘がよくまたげました。

十　吉。　べら棒奴！たつた一人の妹の家へ兄が訪ねて來られねえつて法があるかい。お大名の御殿ぢやあるめえし、こんな貧乏世帶の闘ぐらるまたげられなくて、ごうするもんだ。馬鹿にするなよ。

おこよ。　えゝ兄さん。

十　吉。　何んだよ。

おこよ。　お前さんはごうしたら眞人間になれるのだらう。妾を何處まで苦しめるのだ。

十　吉。　おやつ。またお念佛か。桑原々々。よせよ。おいらの耳は馬の耳。（ト形たまれる）憚りながら釋迦が逆さになつて意見したつて、利き目のある事ぢやねえんだ。その代りに、またお闘魔樣に叱られたつて、駭然ごもする事はねえや。今日あつて明日の知れねえ命だ。せめて婆婆にゐる間だけなりご好き放題で暮らすのよ。

おこよ。　お前さん、命は惜しくないのだね。

トごかりと横になる。

十　吉。　えゝ、妙な事を聞きやアがるな。命惜しいなんて云ふ事は物持のたまくだよ。俺らのやうな裸一貫の人間は手前の命なんぞ下駄で踏まれて、ぎゆつこくたばる蛙の命ほどにも思つてやしないよ。

おこよ。　そんな安い命なら、自分で死んで了ふがいゝ。その方がよつぽど世の中の爲めなんだ。

十　吉。　ふん、洒落れた事を吐しやがるな。死ぬのは厭はねえが、咽喉突いたり、首縊つたり、その手續きが面倒で死ねえのさ。おい、そんな事を云はねえで、久し振り訪ねて來たんだ。また幾らか廻してくんねえか。

おこよ。　えゝ。

十　吉。　近頃は滅法稼いでゐるこいふぢやねえか。今日は一兩二分もありや澤山だ。下京の賭場ですつからかんに、はたいてしまつたんだ。なア、可哀そうだご思つて幾らか資本を貸してくれよ。えゝおこよ。一人の兄の云ふ事ぢやねえか。そんな厭な面をするない。

おこよ。　えい。（ト身を退いて）またこの上、妾の生血まで嚙り、骨までしやぶらうご云ふんですか。

十　吉。　えゝ、聞いた風な事を云ふな。手前えの骨なんぞ、しやぶりたくねえが、金が欲しいんだ。

おさよ。兄さん。（ト寄る）

十吉。何んだよ。

おさよ。お前さんはごの口でよくも、そんな事が云へた。義理知らず！人非人！畜生！

十吉。え、何んだこ。ひごく風向きが悪いな。俺はお前の兄だぜ。おい。

おさよ。兄こ云はれるのも、妹こ呼ばれるのも、もう厭です。お前さんにも少しは人間の血が通つてゐたら、妾に合せる顔はない筈だ。散々お母さんや妾を困らしておいて、それで懲りもせず、稼入り先きの家まで來て度々の無心、その揚句には亭主の謀判をしてまで、よそから金を騙り取らうごは、、、、妾や、兄弟こ云ふ慾目に引かされて、まさか、お前さんがそこまで悪い事をしやうごは夢にも知らなんだ。

十吉。（流石にきまり悪く）そ、そんな事はねえ。そんな憶えはねえ。

おさよ。憶えがないこは云はさない。妾は今日皆聞いたのだよ。お前さんは何んこ云ふひごい人だ。人の好い亮三郎さんはそんなひごい目に逢はされても妾が可哀さうだこ云つて誰にも内證で自分の借錢のやうに、元金も入れ、高い利息も拂つてきたのです。何んにも云ふなこ口止められたけれご こゝまで苦しめられて、お前さんの顔を見たら、妾や云はずにはもう居られぬ。そんな事をして置きながら、平氣な顔をして、その上に無心こは、、、、その了見が淺猿しい。

ト泣く。

十吉。何にが淺猿しいんだ。世間にはな、親の爲や兄弟の爲なら島原へ身を沈めても難儀を救ふ女もあるんだ。

おさよ。まアお前さん。

十吉。大體な、手前だけの器量があつたら何にもこんな貧乏な亮三郎なんぞの意久地なしこ夫婦にならなくつてもよ。俺ら左團扇で暮らせる身なんだ。俺ア始めつからあの野郎こ夫婦になる事ア氣に喰はねえのだ。

おさよ。え、、それぢやお前さんはまだ此上に妾を食物にしやうこ云ふんですか。

十吉。何にが食物だ。操を賣つても親兄弟を助けるのが女の道こ云ふのだ。

おさよ。まア穢らはしい。歴こした亭主のある潔白な妾に、そんな穢はしい事をけがにも云つて下さるな。

十吉。何に潔白だ。ふん、大きな事を云ふない。手前だつて娘時代にや、私生兒の一人も生んでるぢやねえか。お互ひに袂を拂へば塵が出るよ。

おこよ。　兄さん！（わな〳〵と顫るへて）お前さん何んこと云ふ事を云ふのだ。そんな事、、、、そんな事を云つてお前さん、、、、亭主の眞正直な氣心を知つてゐる筈だから、もしそんな事を知れたら、妾は去られねばなりません。

十　吉。　去られたら、い、ぢやねえか。野郎こ違つて、女は退けば長者が二人あるこよ。

この間亮三郎窓の下まで歸り來て立ち聞く。

おこよ。　兄さん、妾の弱身につけ入つて、威赫そうこ云ふんだね。

十　吉。　そんな事もねえが、お前が餘り大きな口をきくからサ。

おこよ。　さア、それも誰れが妾に子を產ますやうな事をさせたのです。みんな兄さんがさしたのぢやないか。その時かて、やつぱり人の謀判をして、すんでの事に繩目にかゝる處をお母さんはお前さんが可愛いばかりに、妾奉公をしてゞも、家の爲、一人の兄を救けて呉れこ、泣いて賴まれた爲でござんす。それやこれやで、苦に病んで、お母さんは死んで逝かれた。あの時の事を忘れたのか、え、。それに妾がいたづらでもして生んだかのやうに云へば互ひの恥になる事。もし此事が亭主の耳にまで這入つたら、それこそ妾の操を信じてゐるあの人は氣でも狂ふて了ひます。その事を今此處てそれをあばく位ならいつそお前の手て一こ思ひに殺してお呉れ。ごの道妾

やお前こ一所には生きて居られない。お前が死なゝければ、妾か死ぬだけだ。

この時亮三郎驚いて家に入る。

亮三郎。（極度に亢奮をして）おこよ！

おこよ。　まア。

亮三郎。　あゝあ。お前は、いゝゝゝ今のその私生子を生んだこ云ふ話は、そゝそりや本統か。

十吉詰らなさそうに、すうこ臺所に來て茶碗酒を呑む。

虫の音。

おこよ。　亮三郎さん、、、、か、勘忍して、、、、（泣く）

亮三郎。　あゝ。ややつぱり本統か、、、、やつぱり、、、、あゝ俺は、、、、俺は今まで、美しい夢を見てゐたのか。あゝ、俺は、、、、俺は氣が狂ひそうだ。（ト煩悶）

おこよ。　濟みません。濟みません。

十　吉。（嘲笑的に）へゝん、はふ日の娘に、やぼな生娘があるものかい。おこよ、かうなりや洗いざらい、尻尾を出しちまひねえよ。

亮三郎。　いや、もう何にも云つてくれるな。聞けは聞くほゞ、俺の心が壞されて行く。貧しい生活

をして行く俺はな、せめておさよの操を金よりも尊いものと思つて、どんな苦しみにも打勝つてきたのだ。それが今となつては、、、、、、（ト落膽）

十　吉。　お前は正直者だな。ふ、、、、。

おさよ。　申譯のしやうもありません。皆妾が悪いのです。その爲、今までどのやうに苦しんでゐた事か、、、、思ひ切つて、打明けて許して貰はうと、幾度思つたか知れませんが、お前さんの一圖な氣心を知れば、知るほど妾や云ひそゝくれて了ひました。それも皆、お前さんがいとしかつたからです。けれど、かうして何にもかも解つて了つた今になつて見ると、三年の間苦しんで來た胸の悶えも、今では却つて晴れたやうな氣がします。

亮三郎。　あゝあ、俺は闇の底へ突き落されたやうだ!!

おさよ。　濟みません。

永い間沈默が續く。

虫の音。

近所の世話方が來る。

世話方。　亮三郎さんや。

亮三郎。（驚いて）はい。はい。

世話方。　今夜はお前さんの夜番だが、近頃は用愼が悪いで、早う廻つて下さい。

亮三郎。　はい／＼。少し取込みがありましたので、つひうつかりして居りました。今直ぐ廻ります。

世話方。　早う頼みます。

ト去る。

亮三郎はぢつと行燈の灯影に打悄れておさよを見る。兩人は顔を見合す。（亮三郎はおさよに對して許し難き心）そのまゝ消えるやうに出て行く。おさよは泣くに泣かれず。いつまでも悄然としてゐる。

永い間。

十　吉。　亮三郎のあの樣子ぢや、お前と別れる氣だよ。ふん、馬鹿な奴だ!!

ト又酒を飲む。

藤田屋の小僧良一が封箱を持ち、提灯を下げて來る。

良　一。　頼みます。

おこよ。（力なく）はい。

良一。若日那から、これを。（ト封箱を出す）

おこよ。（はつとして）あゝさうでしたか、御苦勞でした。

ト封箱の中から小判を受取り、行燈の傍に置いて良一に封箱を渡す。

おこよ。確かに受取りました。有難うございましたと、宜しくお禮を云つて下さい。

良一去る。その間に十吉は臺所から這ひ出て、小判を手に取る。

十吉。おやつ、小判で貳拾兩。

おこよ。（ひやりとして）お前さん、その金をどうしやうと云ふのだ。

十吉。お前があの野郎と別れる手切金だ。俺が預つて置いてやらう。

おこよ。（驚いて）ひえつ、そんな事をしられては、、、、もしお前さん！

十吉。何んだ。可いぢやねえか。手前の手切金だと云つてるのに。

おこよ。馬、馬鹿な。妾はまだ亮三郎さんと別れてやァしない。お返し。

ト取戻さうとする。

十吉。馬鹿だな。手前が別れねえ氣でも、先方ぢや氣がねえや。

おこよ。飛んでもない。たとひ、妾が去られても、その金をお前に渡すわけには行かぬ。

トとり附く。

十吉。え、、何にをふざけた事を、、、、

トつきのけて、飛び出さうとする。驟く拍子に傍にあつた、ぼてを引くりかへす。

おこよ。兄さん！（ト力限りに十吉をひきすへる）お前さん、どうでもそれを取つて行かうと云ふのだね。

ト血相をかへて詰め寄る。

十吉。（氣味惡るそうに）な、なんだ。手前にや、それが不服だと云ふのか。

おこよ。お前さん、お前さんの根性はどうしても直らないんだね。

十吉。なほらなきや、どうすると云ふのだ。

おこよ。、、、、（ぢつと下を見ると、引くり返つたぼての中から飛び出した小刀が見える）

おこよは矢庭に小刀をつかんで十吉につきかゝる。

十吉。なゝなにをしやァがるんだ。うぬ俺を。

おこよ。お前みたいなものを生かして置いちやァ世間の、、、、

ト突きかゝる。兩人互に爭ひ、十吉行燈につきあたりて倒れる、灯消えて月光射し込む。

おとよはきッとなつて十吉の手を押え、

十吉。な、な、何をしやがるんだい。

トまさかと思つて油斷する。

おとよ。お前さんは、ごうあつてもこのお金を盜つて行くのかい。

十吉。ごるごは言はねえ、二三日貸せこいふのだ。

おとよ。えゝ、お前さんこいふ人は、、、、

ト突然十吉の胸を一突きに突刺す。

十吉。あッ、おとよ。これ、うゝむ——。

ト十吉は苦悶して斃れる。おとよ限りなき昂奮の狀。月光蒼白く十吉の屍とおとよの姿を照す。

虫孝りに啼く。

おとよ吻ッとして十吉の姿を見て駭く。

長い間。

虫の音。

夜番の拍子木の音が漸次に近く聞えて、亮三郎が何氣なく入口から内を覗き、不審に思つて座敷に入り、ふと十吉を見て、

亮三郎。ひえつ！

ト屹驚して轉び落ち、おとよの傍に來り、その手を取つて

亮三郎。おとよ〳〵。

おとよ。（無言）

亮三郎の驚駭、おとよの亢奮、しつつも次第に觀念の眼を閉つ。（暗轉）

第二場　同家の表口

時　前場の夜更。

場所　同家の表入口。

高瀬川の岸に臨める往來を隔てゝ上手寄奥に、庇の低い濁つたように朱黑(あかぐろ)い千本格子造りの家体、入口は格子戸の上手につゞいて設く。よき處に柳の立木二三。川岸に高張提灯を灯した御用船が一艘繫かれて、警固の侍が二人提灯を持つて入口の處に張番をしてゐる。

下手は町家の遠見。

始め提灯の灯だけが闇に輝やく、傾て格子戸にぼうつと灯がさして來て、次第に舞臺面が分明になる。全體が陰氣に夜の霧に蔽はれてゐる。何處からとなく淋しい機織(はたおり)の音が洩れて來る。近所の男女が大ぜい佇立んで、ひそひそと呼やきながら入口の方に自然と寄添ふて内部(なか)を覗かふとするのを、警固の侍が靜かにそれを制す。

（間）

近所の男、源二、林作、太十、茂吉、三郎など重苦しい沈默を續けて溜息を吐いて顔を見合はす。

林作。　もし、おこよさんもよく〳〵我慢が出來なかつたこ見えますな。

源二。　そうでせう、年が年中あの十吉ごきたらおこよさんを苛めぬいてゐたのだ。こりや神樣がおこよさんにあの男を殺させたのです。

茂吉。　そうです、そうです、慥かに神樣がお憤りになつたのだ、しかし、かう言つては何んだけど、あの十吉が殺されたので、どれだけ安心をするものがあるか分りやしません。

三郎。　そうですこも、どうせあの男は滿足な死態はしないこ思つてゐました、まだ妹の手にか、つて死んだのは仕合せだ、普通(あたりまへ)ならお上(かみ)の手にか、つて、四條磧で磔刑(はりつけ)にてもされる代物です。

林作。　でも、おこよさんが氣の毒だ、どんな悪い奴でも兄殺しの罪は免れまい。

一同。　ほんに氣の毒だな。

三郎。　しかし、女の手であの荒くれ男をよく殺されたものだな、それが不思議だ。十吉こ聞い

たら京の者はみな除けて通るくらいだのに？

太　十。（先刻からぢつと考へてゐたが吻と溜息を吐いて）たつた一こ突きだつたのだ！（ト自分の胸を叩いて）女でも一心こいふものは怖しい。積りつもつた怨みがいつぺんに破れたのだ。無理もない、ごんなものだつて、あんな性悪な兄だつたら殺す氣になるだらう、、、、。

茂　吉。本當におさよさんを救けてあげたいものだなあ。

太　十。無論のことだ。かうなつたら西陣ぢうのものが血判をしてゞも、お上へおさよさんの命乞をするまでだ。

警　固。おい／＼、すこし靜かにせんか。

一　同。はい／＼。

この時入口より近所の婆おしも出づ。一同はおしもを取卷く。

おしも。あゝあ、おさよさんくらい健げな女子はこの京ぢう探しても二人こあるまい、見上げたものだ。

太　十。おさよさんはごうなりますかな。

一　同。早くそれを聞してください。

おしも。ごうしても曳かれて行かれます。

太　十。えゝ、やつぱり曳かれますか、あゝ!! そりや詮方のないことだ。

茂　吉。氣の毒なことだなあ。

おしも。しかし、先刻からお役人樣のお取調にお豐さんは言葉ひとつ澱まず立派に申し開きをなされました、男でも出來ないことです、ほんこに見上げたものです。

太　十。いや、おさよさんならそうあらう、さうなくてはならぬ。

一同感心の色。

警　固。靜かに／＼。

爰へおさよ縄をうたれて警固に守られ、役人町田とともに出づ。近所の人々は氣の毒さうに見遣る、涙を啜る音、おさよは默つて會釋をする。亮三郎の妹お靜が駈出して來ておさよに縋る。

お　靜。あれ、嫂さん。（ト涙）

警固の侍はお靜を遮らんとするのを町田は捨置けと眼で知らす。

おさよ。（落着いてお靜に向ひ）お靜さん、ごうか泣いてくださるな。

お　靜。　でも嫂さんがこんなことになつたら、妾――妾、、、、（ト嗚咽する）

おさよ。　これお靜さん、泣いてゐる場合ではありません。妾がゐなくなつたら、尙更お靜さんにしつかりして貰はねばなりません。兄さんのことはあなたに賴むより外にしやうがありません。それにこれから段々きつう冷えて來ます。妾がこのあいだから縫ひかけてゐた兄さんの布子、あれを桁丈の合ふよう、眞綿をたんと入れて寒うないよう温かに仕立て、上げてくださいな、またお前さんも身體を大切にして、（さすがに涙に震えつゝ）ごうぞ妾の代りに兄さんの面倒を見てあげてください、、、、。お賴みをします。

お　靜。　は、、い。

近所のもの涙を啜る。

町　田。（同情の涙を拂つて）これおさよこやら。

おさよ。　はい。

町　田。　その方餘儀なき事情があつたにもせよ。兄殺しの大罪を犯した身で、先刻からの取調に對して、惡びれた模樣もなく、罪人にも似ず晴やかな面色をしてゐるのは、どうしたのぢやな。

おさよ。　はい、兄を殺したのは重々惡うございます。けれどもお役人樣兄殺しの罪よりもあのや

うな怖しい兄を殺したことは世の中の爲に何によりもよい事をしたと思つて居ります。お高庇樣で妾達兄妹もこれで救はれました。

町　田。　なる程な、男も及ばぬ立派な心ぢや。同じ血を分けた兄妹でありながら、お前が持つてゐる心の萬分の一でもあの十吉には宿らなかつたか、思へば不愍な兄妹であつた。

おさよ。　何事も因緣だと諦めて居ります、もう覺悟は致して居ります。

町　田。　お上にも慈悲はあるぞ、決して心配いたすな、最後まで潔ようせい。

おさよ。　はい、悅んでお繩を頂戴いたしました。

町　田。（暗涙に咽び）送られたうへは容易に音信も許されまい、もう言ひ殘すことがないか。

おさよ。　有難うございます。思ひ殘すことは何もございませぬが、たつた一つ。（ト涙）

町　田。　うむ、何事でも言ふがよい、掟の許す限りは取計ふてやるぞ。

おさよ。　はい亮三郎へ緣附きますまへに妾が犯した罪を、今一度亮三郎に、、、、心から詫が致したうございます。（ト泣き伏す）

町　田。　うむ。

お　靜。　嫂さん、、、、。

トおさよに縋つて泣く。亮三郎家のなかより走り出で、

亮三郎。　おさよ！

おさよ。　あッ！あなた。、、、、

亮三郎。　お前が悪いのでない、俺はもう何にもかも許してゐるぞ。

おさよ。　ひえつ、　許して下さる、有難うございます。（嬉れし泣き）これで安神してまゐります。

ごうぞお體をお大切に、、、、。

一同暗涙に咽ぶ。お靜は再びお豊に寄添ふ。町田に遮られて跟跟めいて、泣伏す。おさよは靜かに船に乘る。

月光蒼白く輝く。

おさよ良人の顏を見まいとして瞑目して空を仰ぐ、涙に濡れたおさよの面に月光美しく冴返へる。

役人町田徐かに船に乘る。何處からか尺八の音色流れて、船漕ぎ出す。

見送る人々の啜り泣く涙の音、次第に激しくなつて。

—（靜かに幕）—

附録

解說
興行年表
劇評

背　小織桂一郎
装　鈴木富喬
編　松永端
輯　植苗寅吉
顔
字
印
刷

岡田技手

〔大正九年八月作〕

小織一派の成美團から都築文男、木下八百子、野澤英一などが連袂して國際活映株式會社演藝部が經營した樂天地へ駛つた爲に、成美團は若手の中堅を失つて稍寂寥の感があつた。ひとり小織の孤軍奮闘に依つて克く死守したが、ちようどその頃山崎長之輔一派も人氣は凋落の秋に落ちつゝあつたので、松竹では兩座を合併して、それに東京から深澤恒造、武田正憲などを迎へて、新たに關西新派劇といふのを組織した。そして從來の晝夜二回興行制度を廢して、浪花座で一回興行を打つた。爰に於て聊か新派劇の權威らしいものが出來たわけである。その第一回は「酒中日記」と「糸のみだれ」を上演して一座はすぐ九州地方へ巡業に出懸けた。第二回のお目見得がその年の九月のことであつた。

自分はその頃この劇團の脚本を擔當することになつてゐたので、六月頃から色々と考案に耽つてゐたが、何分第一回は脚本の選定を誤つたことでも言はうか、餘り成功の方ではなかつたので、第二回は餘程愼重に研究せねばならなかつた。結局看客吸收策のうへからその頃大阪時事新報の懸賞第一等當選小説國分まさを女史作の「月見草」といふのを上演することに確定して、自分は脚色の任に當つた。五幕五場に脚色して、その本を抱へて一座の巡業先長崎へ出張したのは八月中旬のことである。

ところで、時間の都合上如何しても一時間ほどの一番目を附けねばならないことになつたが、月見草と對照して、すつかり味の變つた作品が容易に見當らない。長崎の武井屋旅館で毎日最高幹部會議を開いたが、何分にも旅先のことではあり、いつも小田原評定に流れて了つて、すこしも纏らない。小織君は「茶を作る家」を提議するし、舞臺監督の小島孤舟君は「湖畔の家を」提出した。

――自分としてはどちらでもいゝのである。早く纏ればいゝので、早速松竹の白井社長にそのことを打電すると、「茶を作る家」も「湖畔の家」も不可ない、是非新作にせよといふ返電が自分の手に來た。――新作にせよと言はれたからとて、さうざらに新作が轉つてゐるものでない、殊に平素何氣なく雜誌などを讀んでゐる時には、これを上演したらと思ふものもないではないが、さて脚本に行詰つて探すとなると中々見出せないものである。と言つて一番目がありませんからと「月見草」だけで歸阪するわけには責任上不可ないことだし、餘程自分も苦しんだ揚句、「詮方がない、ぢや何か書かう」と腹案もなく引受けて了つた。まつたく何うにも仕樣がないから引受けたので、內心甚だしく心細い次第であつた。

「大丈夫ですか」と、小織君は朝夕心配した。仕事に對しては可成り神經質な自分は馴れた書齋の埃り一つにも氣が焦々するたちで、況して旅先の親しみのない机に向つたところが、迅速にプランが

立ちさうな道理もない。そのうへ「月見草」の脚色に根氣を費つてまだ疲勞が何處かに殘つてゐる時である。ちようど無一文で大晦日が迫るような心持で、毎日焦々しながら、あのエキゾチックな匂ひの漂ふてゐる長崎の街をわけもなくぶらついて太田君（木下杢太郎君）を憶ひ出したり、シーボルトのことを考へたりして更に構想が湧いて來ない。――まつたく氣でも狂出しさうであつた。

或日ふと自分の從兄姉の聖が中學を卒業すると鐵道に這入つて、三十有餘年間技手となつて未設の土地を建設して歩いた。その男はいつ逢つても鐵のやうな着實さを失はない、時稀に東京へ出張して來ると必ず親戚を歷訪して、何かにつけて心配をして呉れる人であつた。ヅブ田舍者には違ひないが、決して泥臭い無智な方ではなかつた。隨分わけの解つた義理堅い人であつた。――殊に自分に對しては幼少の頃から好感を示して、時折鞭韃した書面などを寄越して呉れた。ところがその年の春越前の敦賀に出張してゐるあいだに死んだといふ通知を受けた。自分は駭いて是非葬式だけにでも列席しなければ濟まなく思つて、すぐ行くと打電したまゝ、用事の都合で如何しても行くことが出來なかつた。あとで聞くと發狂して死んだといふことである。あれだけの正直な心を持つて生涯を未開な山中ばかりに暮して來た技手の一生を考へると、心から涙ぐまれて來る。――自分はいかにも悲壯な感に打たれて、その當座はその人のことばかり考へてゐた。親孝行で、兄弟思ひで、

何一つ贅澤をするでもなく、幾百哩か幾千哩かの鐵道施設工事に身を捧げて來た從兄弟の生涯こい、ふものは、氣の毒こいへば氣の毒、正直すぎたこいへば言へるが、また一面から考へるこ輕佻浮華な現代に於て、容易に求め得られない尊いものがあつたように思はれる。――で自分はその人の持つてゐた心持だけを取つてこの岡田技手を書いてみる氣になつた。この戯曲のなかに盛られたような悲壯な事件がその人の生涯にあつたわけではないが、人生に對する態度は斯うもあつたらうこ思ふ自分の想像である。

――長崎を打上げて、下關を三日間打つ頃から書出して、歸途汽車のなかでも喫煙室に閉籠つてずつこ書通しながら梅田に着いて漸く豫定の初日に間に合すこゝか出來た。忘れるこゝの出來ない苦しい思ひ出の一つである。

主なる興行年表

岡田技手

年時	座名	題名	役割					
大正九年九月	大阪 浪花座	岡田技手	岡田技手	弟一雄	お豐	殿村技師	山川技手	清	小使
大正九年十月	神戸 中央劇場	岡田技手	小織桂一郎	柳永二郎	桃木吉之助	武田正憲	佐久間滿	瀬戸日出夫	深澤恒造
大正九年十一月	京都 明治座	岡田技手	小織桂一郎	柳永二郎	桃木吉之助	武田正憲	佐久間滿	瀬戸日出夫	深澤恒造
			小織桂一郎	柳永二郎	桃木吉之助	武田正憲	高橋義信	瀬戸日出夫	深澤恒造

劇評〔大阪時事〕大平野虹君の從來の作品に比較するこゝこれは淡彩畫に等しい、けれども何處かに作者の個性がよく現はれて、力強く看客の心底に響くものがある。結末はもう一つ物足りない未製品の感じがするが全體こしてはよく引締つてやはり近來稀に見る一幕物である。小織の岡田技手は例の老練なる演出法に依つて充分性格を現はしてゐた。武田の殿村は若い學校出の技師こいふこゝをよく現はしでゐるが、幕切になつて調子の上づるのが難、柳の一雄は熱はあるが放浪畫人らしい扮裝に研究が足りない、深澤の小使はワキ役で看客を欣ばしてゐる。ひこり桃木のお豐が、かうした新作物には際立つて新派臭かつたのが眼障りであつた。

巴里の一夜

〔大正十年一月作〕

京都の神樂丘から八幡南山の築山別莊を借受けて移轉した頃、町の端に俗に六區といつて特殊部落の生活を、自分は一種の好奇心から研究してゐる裡に、漸次親しみを覺へて、普通一般が憎惡することの出來ない美點を彼等の生活や性格に見出されて來た。傳統された社會制度の缺陷から習慣づけられて、彼等は如何しても世間に出られない、さうした不條理な壓迫から團結せずにはゐられない彼等の部落には、迚も想像も及ばない團結力があり。それと同時にまた怖しい僻みを持つてゐることも確かである。けれどもよく考へてみると、同じ日本民衆と生れたものが、さうした僻みを持つて平等に附合はれないといふ事は、附合はない方に七分罪がある。まさに世間の方が悪いといふことを始めて感じた。——よく庭園の手入れや畑の栽培などには、自分は特にこの特殊部落のものを雇つて、自然彼等とも口を利くようになつた。働らくことに於て骨を惜まないといふ事は非常なものである、さうしてその勞働賃銀などに對しても普通より三割方安い、勞することと多くして得ることころ尠ない彼等はそれに滿足して、怠けるなどいふことは微塵もない、それまでにしても彼等は普通に世間に容れられないといふことは、餘りに慘めである、誰だつて僻まずにはゐられない。

收獲の頃月夜などに自分はよくその部落に足を踏入れて心から同情をした。さうして蒼白い秋の

夜の月が冴返へる軒下で美しい聲で小唄を唄ひながら夜業にいそしんでゐる光景などを見ると、まつたく一種のポイテカルな感動に思はず足を止めることなどがあつた。その頃有名な或る學者がこの界隈から出た人だといふことを聞いた。その學者は語學も六ケ國に通じ、殆んど代表的な學値を有してゐながら、出身が出身故に如何しても大學教授になれないといふことであつた。巴里に留學中でも友人はその學者に「もう日本などには歸るな」といつたさうである。自分はそれにも反感を抱いた、學閥の愚劣さ、料見のせゝこましさ、幾ら平等を叫び、開放主義を唱へても、さうした事實が現代に弊存されてゐるとしたならば、その質よりも量を重んじ、心よりも型にのみ囚はれてゆく薄ッぺらな思想を呪はずにはゐられなくなつた。おこよ源三郎が身許が露見して自棄を起し、遂に殺人を犯すまでに到つたのは、誰が悪いのだらう、彼が身許さへ露見しなかつたならば立派に德川幕府に寵用された有爲の器であつたに違ひない。

人種の差異とか、出身の善惡は人間の力で什麼することも出來ない不可抗力のものである。それを無意味に憎惡するなど、いふことは本當の意味に於て人類に對する愛を知らない人達である。それらに對する同情がいつの間にか自分の頭に膠着いて、惠れない運命に生れついて來た二つの不幸を結びつけて書いてみたのがこの巴里の一夜である。

主なる興行年表

巴里の一夜

年時	座名	役割／名題					
大正十年一月	京都（都）座	巴里の一夜	都築文男	河原市松	山田好良	喜多治郎	桃井文夫
大正十年三月	神戸中央劇場	巴里の一夜	都築文男	河原市松	山田好良	東辰夫	中林小三郎
大正十年五月	大阪辨天座	巴里の一夜	都築文男	河原市松	山田好良	東辰夫	中林小三郎

劇評〔神戸又新日報〕フアンネストといふ混血兒の女と日本の留學生の戀痛な變愛を取扱つた點にいつもとは違つた作者の着眼點が甚く新しい感じを與へる。河原のフアンネストはこれまでの千遍一律な演出法とは違つて稀に見る熱演で、この調子を失はずに進めば結構、都築の高崎はその人らしく慎しやかに演つてゐるが、殊に二幕目になつて東の和田博士との對話は滿場涙を絞らして、明らかに脚本の力といふことを思はしめた。〔關西日報〕東の博士は什麼にも子弟に對する情愛が臺詞の一言一句によく現はれて學者らしい性格をよく演出してゐる、河原のフアンネストは可

憐な混血兒が生みの父を慕ふ情がいかにも自然に現はれて此優としては近來の上出來である。都築の高崎は熟一方で場面を締めて行く努力を買つてやらねばならぬ、山田の彌枝子はそのヒステリックな點をよく現はしてゐるが、聊かやりすぎる感じがある。中林の石井は役が重すぎた。

受難者〔大正九年六月作〕むやみにラッセルを讀んでゐた頃である、ちようど歐州の戰亂が終局を告げた時分で、戰爭が齎らす國民の不幸をいろいろに考へてゐた。――その頃自分の家に小間使として來てゐた或る小作人の娘がゐた、自分は何んといふ事なしに、その娘が可憐しかつた。無論唯可憐しかつたといふのみで、それ以上怎うといふのではない。しかし若し自分がその娘を犯したと假定したならば、娘の生涯はどういふ破滅を來たしたであらうと想像すると、身内が慄然とするほど怖しいものがあつた、その戰慄は人間が持たねばならぬ道德上の要素だと考へて、想像から來る戰慄を中心にして、歐州の大戰を背景にして構想を練つてみた。殊にヘッペルを愛讀した自分には、ラッセルの社會觀とともに餘程感化を受けた點が多かつた。さうしたものがいつの間にか醗酵して、思ひきつて劇のスケールを宏く取つてみたのである。この作品を浪花座で初演の時、自分のために組織されてある野虹會の第三回觀劇會が催されて五百有餘の所謂組見なるものがあつて、舞臺で花輪受をさせられたのは聊か閉口したが、忘れ難ない記憶の一つである。

主なる興行年表

受難者

年時	座名	役割／題名		
大正九年十月	浪花座（大阪）	受難者	小織桂一郎	英太郎	池見成美	高橋義信	武田正憲
大正九年十一月	中央劇場（神戸）	受難者	小織桂一郎	英太郎	池見成美	高橋義信	武田正憲
大正十年九月	明治座（京都）	受難者	高部幸次郎	英太郎	喜多治郎	東辰夫	—
大正九年十月	浪花座（大阪）	受難者	深澤恒造	佐久間滿	柳永二郎	安原國哉	玉井章
大正九年十一月	中央劇場（神戸）	受難者	深澤恒造	佐久間滿	柳永二郎	安原國哉	玉井
大正十年九月	明治座（京都）	受難者	小織桂一郎	柳永二郎	—	木村操	小栗武雄

劇評

〔大阪朝日〕大平野虹氏作「受難者」三幕は、高山家小作人の娘お柳は主人の息子實哉に貞操を捧げたが、身分の違ふのを悟つて戀人の婚姻を妨げないやう西伯利へ出奔し、偶然にも留學の歸途戀人に又遇ひ、その危難を救ふため、殺人罪まで犯し、剩さへ露人に辱しめられて、その胤を宿して歸鄉し、尙戀人夫婦に迷惑を懸けぬ爲自殺する。

元は簡單な男の性慾から出來上つた事が遂ひに女の尊い運命を滅茶々々にすると言ふ「受難者」としての女の悲劇を的にした作者のモチーフは尊重するが—それを新派式に誇張して筋書に依て見たくなかつた。たゞ獨り娘の死を悲しみながらごう報復する事が出來ぬ憐れな老夫婦が活きたのでー漸つと大詰で蹈み止まつた形だ。

小織の實哉型の如く言へば上出來だが、この人は役の人間味よりも一座の大將らしい一種の力の方が勝ち過ぎる。英のお柳心持がよく受取れたが、洋服姿が見すぼらしい。深澤の老父は山氣を拔けば上々の出來。

御用船〔大正十一年八月作〕この年の浪花座九月興行に舊派の連中へ東京から喜多村を加入させることになつたが肝腎の喜多村の出し物がない、「新樹」にしようか、「黃楊の櫛」にしようか「城」にしようかと、評議區々であつたが舊派の連中と附合ふうへに於ていづれも適當しないので、

結局白井社長が一時間ほどのものを何か考へて書けといふ命令であつた。それが餘程押詰つてからのことである。俄かのことだから靜かに考へる餘裕も何もなかつた。――一二年前に確か大阪の玉造邊に仕樣のない無賴漢があつて、嫁入りしてゐる自分の妹を窘じめ通して來たが遂に妹はたゐきれなくなつて兄を殺した、兄殺しの公判が開かれる以前に近所の者がその妹を氣の毒に思つて町内ぢうが連署して裁判長に嘆願書を出したといふ事實談を自分は確か三面記事か何かで記憶してゐたので、それを骨子にして考へてみた、考へるのは隨分考へたのだが、書くのはもう日が足りなくなつて、事實眞面へ引籠つて本當に一晩で書上げた、讀返してゐる遑もなく本讀をしたほどの急作である。作品の内容は兎に角だらさずに俳優を巧みに使ふことしたといふことのほか何もなかつた。

主なる興行年表

御用船

年時	座名	役割／名題	
大正十一年九月	大阪浪花座	御用船	おとよ　喜三郎　十吉　張七　お靜　富五郎　町田
			喜多村緑郎　嵐吉三郎　尾上卯三郎　尾上喜久太郎　中村紫香　中村嘉七　――

大正十一年十月	東京明治座	秋の一夜	喜多村緑郎　梅島昇　福井茂兵衛　花柳章太郎　瀬戸日出夫　大東鬼城　松本要次郎
大正十二年十一月	名古屋歌舞伎座	御用船	喜多村緑郎　梅島昇　福井茂兵衛　武村新　瀬戸日出夫　大東鬼城　喜多治郎
大正十三年十月	神戸松竹劇場	御用船	喜多村緑郎　嵐吉三郎　尾上卯三郎　市川小太夫　英太郎　實川延五郎　市川猿之助
大正十三年十一月	東京都南座	御用船	喜多村緑郎　嵐吉三郎　尾上卯三郎　市川小太夫　英太郎　實川延五郎　市川猿之助

劇評〔大阪毎日〕新作「御用船」は大平野虹氏の作で、近來になく面白く見た狂言の一つである。

阿呆正直な絞り職人の貞淑な女房の兄が悪徒で妹婿の謀判で五拾兩を騙り盜つた。その借金の爲絞り屋は夫婦ゝ妹が汗水くになつて働いても追つかず、女房の心を汲んでその借金は先代の殘したものゝ言つてゐたのが一手詰の談判で事情が判りかけるゝ女房が一寸亭主を殴つたが、それが却つて涙の出る夫の嘘であつたゝ知つた處へ、又悪徒の兄が來て、嫁入前の姿奉公をした事を口走つたのを立聞いて一妻を信じてゐた夫は絶壁から突落されたやうに落胆するが女房が兄を殺して曳かれて行かうゝする時に罪を許るしてやるゝ言ふ筋。

この狂言を面白く見せたのは喜多村の女房お豐と卯三郎の兄十吉の藝の力である。おとよは嘉七の金貸がべラ〳〵喋つたのを聞き囓り水臭いと癪つて亭主を責め怨む一條と覺悟を極めて兄を殺さうとする刹那とは藝の力が夫や兄に迫るやうにヒシ〳〵と看客の胸に只押しに迫つて來る。而して細かい技巧と自然な白廻しは「喜多村型の女性」と言ふ鍋型裡の女と言へば言へるが傑作の一つたるを失はぬ。

卯三郎の十吉も「濤昇十八番集」の一つに加へて可い傑作である。例のタメたりカスメたり纖細な技巧に生きる白廻しは「馬方の丑」で屢々用ひられた手法であるが、十吉に適用されて面白味が深めてゐた。

返しの高瀬川を縄付で逐られる場はなくても可いが、舞臺面は面白い捨て難い光景であつた。但し全體の難を言へば、筋書の指定の享保と言ふ感じが出ないで、もつと下つた時代の感じがすることである。〔大阪時事〕 大平野虹氏作の「御用船」一幕享保頃、京都高瀬川に沿ふた處に紋職人亮三郎といふ氣の小さい正直者がゐた。可愛い女房お豐の兄無賴漢十吉の爲め重い借金を負ひながら女房に隱して苦しんでゐたのをお豐が知つた。そこへ十吉が又來た。亮三郎は避けて外出した。十吉はお豐に金を貸せと强ひ、亮三郎に嫁ぐ前にお豐が兄の爲めに人の妾となり子を生んだことを喋

べる。戻つて來た亮三郎はそれを立聞きして驚いた。自分の秘密を夫に知られたお豐は更に問屋から亮三郎に貸して臭れた金を十吉が奪つて歸へらうとするのに取り逆せて小刀で兄を刺殺し、役人に縛られ御用船に乘せられる時、亮三郎にすべてを許るされ欣然として役人に送られて行くと言ふ筋。人物の出し入れがもう一と息熟しないが、可成に面白く出來てゐた。但し故鷗外博士の高瀬船にヒントを得たやうな後段御用船の場は時間短縮の折柄でもあり、なくもがなと云ひたい。

この脚本を仕活した殊勳者としてお豐の喜多村を稱揚して置く。底光りのある此優の細心な技巧は遺憾なくこの一と役に盡されてゐる。吉三郎の亮三郎の一番目で述べたこの人の癖が一段と著しく目に立つ。はて痼疾を先づ癒さねば吉三郎と言ふ人の有つてゐる凡ては葬られやう。卯三郎の十吉圖々しさは相變らず、棄て難い處がある。紫香の亮三郎の妹は姿がよくない。

大正十四年二月二日印刷
大正十四年二月二日發行

大平野虹脚本集第一卷
定價金貳圓參拾錢

著作者　大平規

發行者兼印刷者　京都市上京區二條通高倉東入　植苗寅吉

印刷所　京都市上京區二條通高倉東入　正文舍印刷所

發行所　京都市上京區二條高倉東入　大平野虹脚本集刊行會
電話本局三三五二番
振替大阪二七三八番

版權所有

538

終